下長崎遺跡 両の木神社遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

1989.3

山 梨 県 教 育 委 員 会 関東農政局笛吹川農業水利事業所

甲府盆地の東から南東部にかけて施行された笛吹川農業水利事業国営管水路埋設工事に伴う事前発掘調査は、1976年度に始まり本年度をもって終了いたしました。この間、発掘した26遺跡のうち17遺跡から遺構や遺物を検出し、逐次整理も進めながら調査報告書を刊行してまいりましたが、これも本年度で終了いたします。

本報告書は1987年に発掘した下長崎遺跡と両の木神社遺跡の2遺跡の調査報告を合冊したものであります。下長崎遺跡は山梨県東八代郡八代町永井字下長崎にあって、浅川扇状地の扇端に位置しております。遺跡からは古墳時代、奈良時代、平安時代の住居址10軒、掘立柱建物址2棟、配石5基、集石9基、石組溝1基や土壙などが検出され、また土師器とともに緑釉陶器、灰釉陶器や鉄器などの貴重な遺物が出土いたしました。特に平安時代の遺構と遺物については、八代荘の停廃事件に関係する可能性も指摘されております。さらにこの遺跡の立地上から、八代郷と長江郷との境界に関する問題、条里型地割が施行された時期についても言及いたしております。両の木神社遺跡は、同郡一宮町末木字両の木にあって、御手洗川扇状地の扇端に位置しております。近くに国分寺や国分尼寺があり、ある時期国府があったことも想定されている古代甲斐国の中心地にあります。神社の前を通る大型広域農道建設時に行われた発掘調査では、平安時代の集落址が発見されておりますので、本遺跡から検出された大溝は、この施設か、この付近にあったといわれる古墳の周溝であろうと思われます。

両遺跡とも発掘範囲は、狭いながらも、貴重な成果をあげることができたと考えております。本報告書が今後の研究に、また地域発展のため資することができますれば幸甚に存じます。

末筆ながら、調査のお世話をいただいた関係各機関、直接発掘調査に当たられ た皆様に厚くお礼を申し上げます。

1989年3月25日

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯 貝 正 義

笛吹川農業水利事業に伴う

下 長 崎 遺 跡

両の木神社遺跡

発掘調査報告書

下 長 崎 遺 跡

古墳・奈良・平安時代集落址の調査

例 言

- 1 発掘調査は文化庁の補助金と農林水産省の委託金を受けて実施した。
- 2 発掘調査と報告書の執筆、写真撮影は県埋蔵文化財センター副主幹・文化財主事森和敏が担当した。
- 3 発掘調査、資料整理、本書の作成の参加者は次のとおりである。

発掘参加者 (順不同 敬称略)

○渡辺礼子 ○渡辺征子 臼城福子 石倉幸子 中村隆子 橘田睦美 椚泰子 保坂幸子 斉藤英子 石倉宙美 矢崎美恵子 長坂素代子 斉間千津子 中村あつ子 斎藤寿子 相沢正子 長井よし江 中村悦子 ○宮沢まさみ 青山ちづ子 岩沢久仁子 渡辺はるゑ 石倉栄子 中村広子

整理参加者 (順不同 敬称略)

小池満恵 林部光 長尾美子 荒川奈津江 玄間千鶴 後藤良美 柏木まつ江 宮川東及び上 記○印

- 4 本書の遺構番号は発掘調査時に付したとおり使用したが、資料整理時に欠番としたものもある。
- 5 図面、本文中に使用した略記号は次のとおりである。 SB-竪穴住居址、掘立柱建物址、S-石、SD-溝、SLS-列石、IS-集石、SX-配石(性格不明遺構)、TP-トレンチ、P-ピット、G-グリッド
- 6 遺物実測図の() 内番号は遺構平面図の遺物番号である。
- 7 遺物実測図の番号と遺物説明表の番号のものとは同一遺物である。
- 8 出土した遺物、遺構実測図・写真、遺物実測図・写真等の記録類は全て県埋蔵文化財センターで保管している。
- 9 遺物の編年、出土地名等については県埋蔵文化財センター坂本美夫・八巻与志夫文化財主事によるところが多い。
- 10 遺物の編年は神奈川考古第14号「奈良平安時代の諸問題」『甲斐地域』1983年 坂本美夫末木健 堀内真によった。

目 次

序
例言
第1章 発掘の原因とその経過1
第1節 発掘の原因1
第2節 発掘の経過1
第2章 遺跡の位置と環境3
第1節 位置3
第 2 節 自然環境4
第 3 節 歴史的環境4
(1)歷史的環境4
(2)発掘地域おける遺物分布
第3章 遺跡の地層と文化層7
第4章 遺構と遺物8
第1節 古墳時代8
3 号住居址 6 号住居址 10号住居址 11号堀立柱建物址 12号掘立柱建物址
配石遺構 土壙 集石列 鍛冶遺構 粘板岩を囲む配石 その他
第 2 節 奈良時代20
1 号住居址 2 号住居址 9 号住居址
第 3 節 平安時代24
4 号住居址 5 号住居址 7 号住居址 8 号住居址 1 号円形配石 列石 1
号溝 集石 かまど グリッド出土遺物 陶器 鉄器
第4節 その他52
第 5 章 下長崎遺跡と地域の歴史65
第1節 条里型地割との関係について
第2節 八代郷と長江郷について
第6章 結び

挿 図 目 次

第1図	下長崎遺跡位置図2	第38図	4 号住居址出土遺物実測図2
第2図	下長崎遺跡付近図3	第39図	5 号住居址実測図2
第3図	下長崎遺跡発掘範囲図4	第40図	5 号住居址出土遺物実測図26
第4図	発掘地域の遺物分布図6	第41図	7 号住居址実測図2
第5図	6 G北壁地層図······7	第42図	7 号住居址上層出土遺物実測図2
第6図	1 号トレンチ地層図7	第43図	7 号住居址かまど内出土遺物実測図28
第7図	下長崎遺跡全体図A	第44図	7 号住居址下層出土遺物実測図26
第8図	3 号住居址実測図9	第45図	8 号住居址実測図29
第9図	3 号住居址出土遺物実測図10	第46図	8 号住居址出土遺物実測図30
第10図	3 号住居址出土遺物実測図11	第47図	1 号円形配石実測図30
第11図	6 号住居址実測図12	第48図	1 号・2 号・3 号列石実測図3
第12図	6 号住居址出土遺物実測図12	第49図	4 号列石実測図·····32
第13図	10号住居址実測図13	第50図	5 号•6 号列石実測図32
第14図	10号住居址出土遺物実測図13	第51図	5 号•6 号列石、集石、G出土遺物実
第15図	11号掘立柱建物址実測図13		測図33
第16図	11号掘立柱建物址付近出土遺物実測図…14	第52図	7 号列石、G出土遺物実測図·····34
第17図	12号掘立柱建物址実測図14	第53図	1 号溝実測図35
第18図	1 号配石実測図15	第54図	1 号溝の下出土遺物実測図36
第19図	1 号配石出土遺物実測図15	第55図	水溜付近出土遺物実測図36
第20図	2 号配石出土遺物実測図15	第56図	6 号集石実測図37
第21図	1 号土壙• 2 号土壙実測図16	第57図	7 号集石実測図37
第22図	土壙出土遺物実測図16	第58図	8 号集石実測図37
第23図	3 号土壙実測図16	第59図	7号•8号集石出土遺物実測図38
第24図	6 号土壙実測図17	第60図	11号集石出土遺物実測図39
第25図	2 号集石列実測図17	第61図	2 号かまど出土遺物実測図40
第26図	2 号集石列付近出土遺物実測図18	第62図	3 号かまど出土遺物実測図40
第27図	鍛冶遺構出土遺物実測図18	第63図	4 号かまどの煙道実測図40
第28図	鍛冶遺構実測図19	第64図	2 G出土遺物実測図41
第29図	5 G出土遺物(粘板岩)実測図20	第65図	5 G出土遺物実測図42
第30図	1 号住居址実測図21	第66図	墓地内、6号集石、G出土遺物実測図…43
第31図	1 号住居址かまど見取図21	第67図	6 G上層·下層出土遺物実測図44
第32図	1 号住居址出土遺物実測図22	第68図	6 G下層出土遺物実測図45
第33図	2 号住居址実測図22	第69図	7 G出土遺物実測図······46
第34図	2 号住居址出土遺物実測図23	第70図	8 G出土遺物実測図46
第35図	9 号住居址実測図23	第71図	9 G出土遺物実測図47
第36図	9 号住居址出土遺物実測図24	第72図	11G出土遺物実測図48
第37図	4 号住居址実測図24	第73図	12G出土遺物実測図49

第74図	12G • 13G遺構包含層出土遺物実測図…50	第77図	鉄製品実測図	51
第75図	13G出土遺物実測図50	第78図	銭貨拓影	52
第76図	14G • 15G出土遺物実測図51	第79図	道路セクション図	65
		第80図	八代町小字図	67

図 版 目 次

図版1 下長崎遺跡遠景・近景

図版 2 下長崎遺跡全景

図版 3 • 9 • 1 0 号住居址

図版 4 11号掘立柱建物址 6号住居址

図版 5 1 • 2 号配石

図版 6 2 号土壙 鍛冶遺構

図版7 2号集石列 粘板岩を囲む配石

図版8 1・2号住居址

図版9 4・5号住居址

図版10 7 • 8 号住居址

図版11 円形配石 1・2号列石

図版12 3 • 4 号列石

図版13 5 • 6 • 7 号列石

図版14 8号列石 1号溝 水溜

図版15 1号溝 水溜め

図版16 3号土壙上部 1号溝移築風景他

図版17 11G道セクション 3・5・7号集石

図版18 11・12号集石 1号かまど 6 G遺物出

土状況

図版19 3 • 6 号住居址 SB11付近出土遺物

図版20 S B11付近 1 • 2 号配石 2 • 3 号土

壙 2号集石 粘板岩付近出土遺物

図版21 2・7・8号住居址 5号列石 7・8

号集石出土遺物

図版22 3号かまど 2~5 G出土遺物

図版23 5 · 6 · 7 · 9 · 1 0 G出土遺物

図版24 11 • 12 • 13 • 14G出土遺物出土銭貨

図版25 11 G水溜付近出土遺物 火手鉢 羽口

土製円盤

図版26 鉄器 緑釉陶器

第1章 発掘の原因とその経過

第1節 発掘の原因

下長崎遺跡他2ヶ所の発掘調査は農林水産省が昭和62年度に施行する笛吹川農業水利事業として副幹線管水路を埋設する工事に伴って行った。

この工事は笛吹川左岸の広い畑地帯を潅漑するための管水路を埋設する巾約3m、深さ約3m の溝を掘削する。

第2節 発掘の経過

年次計画で施行されている事業であるので、61年度中に農林水産省笛吹川農業水利事業所、県 文化課と協議し、現地踏査を行って、遺物散布地3ヶ所を試掘することとした。

62年9月17日付第9~12号で下長崎遺跡、宮の後遺跡、下原遺跡の発掘通知を県文化課に提出 した。

下長崎遺跡 発掘は昭和62年10月12日から同年12月23日までの期間に行った。10月6日から試掘した結果によって、遺構包含層までの耕作土等30cm~40cmをバックホーで除去した。続いて全面的に遺構包含層まで掘って、ほぼ間断なく遺構があることを確認した。この間、4Gにかって屋敷墓地があったことがわかり、農水省では10月19日に遺族や関係者の参列のもとに、勝林寺住職の続経によって供養し、改葬の儀を行った。この下層をさらに発掘したところ、鬼高式土器を伴って焼土、かまど址を検出した。

前半の期間は8Gから14Gまでを精査し、実測、写真撮影を約8割済ませた。この間10月21日 に石積した1号溝を、11月10日に1号住居址を、11月18日に15Gで2列の石垣を、11月下旬に5・ 6号列石やその付近で、鍛冶遺構や土壙等を検出した。この間、八代町教育委員、文化財審議会 委員、民俗資料収集委員、浅川中学校PTAや甲府市上石田文化協会等が見学に来る。

後半の期間、11月下旬からは1 Gから7 Gを重点的に調査を行う。全面的に掘り下げたところ、3 G北側から緑釉陶器の破片が数点出土し、後にも灰釉陶器が出土して、重要な地点となった。しかし2 G、3 Gは遺構が重複していて、なお攪乱を著しく受けていて、その確認が困難であった。11月30日に5 号住居址を、続いて4 号住居址を、12月7日に3 号住居址を、11日に粘板岩やその付近の遺構・遺物を、17日に12号掘立柱建物址を、21日には8 号配石等を検出した。発掘調査の終了にあたっては、遺構があった下層を調査するために掘り下げたが、砂礫層(氾濫層)となり遺構、遺物は検出できなかった。なお12月9日には石組の1号溝を八代町民俗資料収集委員が八代町郷土館に移築復元した。

なお、宮の後遺跡と下原遺跡の調査結果については、埋蔵文化財センター「年報」4に報告したとおりである。

第一図 下長崎遺跡位置図

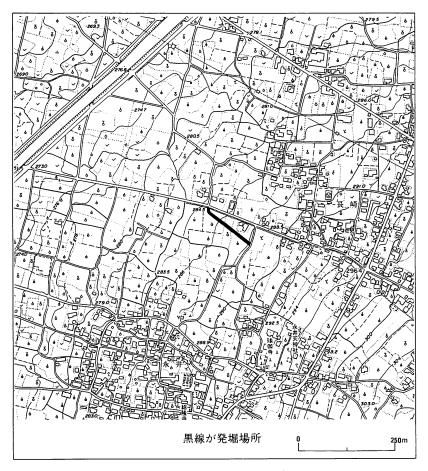
第2章 遺跡の位置と環境

下長崎遺跡は甲府盆地の東部に展開する浅川扇状地扇端にある。浅川扇状地の新しい扇状堆積層は洪積世末から沖積世始め(3万~数千年前)に形成された(八代町誌 1975)といわれ、地表は2次堆積ロームや砂礫で覆われ、肥沃土である。

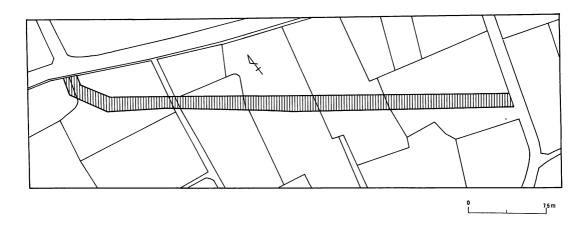
第1節 位置

下長崎遺跡の発掘地は東八代郡八代町永井字下長崎1706番地の1,1704番地、1696番地の1・3. 1700番地で、発掘面積は約560m²(4 m×140m)である。

遺跡は南区長崎集落の南西に接し、果樹園の中にある。県道甲府~八代線の西にある永井天神社と無碍山瑜伽寺から北西へ約200mの地点にあって、甲府市からは約8km南東の地点で、甲府盆地の南東に位置する。



第2図 下長崎遺跡付近図 (<u>1</u>10,000)



第3図 下長崎遺跡発掘範囲図 $\left(\frac{1}{1.500}\right)$

第2節 自然環境

この遺跡は浅川扇状地の扇央から扇端に移る地域にあり、西に約1度緩やかに傾斜する平坦な場所に所在し、標高は283m~286mである。この付近は比較的水利の便は悪いが、少し西に下ると大清水、小清水、道寛池などの小字の地名があり、南北にスプリングラインが走り、その下は水利がよく、水系が発達している。盆地内に発達する急傾斜扇状地の扇端部の多くは、土石流堆積によって形成された微地形のみられる上半部とは異なり、むしろ流水堆積に近い状態で形成された泥流舌状地であろう、といいこの境界付近では湧水(スプリングライン)があるという。この遺跡付近がこの境界であろう。さらにその下は笛吹川の沖積層となる。笛吹川はこの遺跡の1,100m西にあり、浅川等の御坂山塊から流出する諸河川を集め、釜無川(現富士川)と合流して富士川となり、太平洋に注ぐ。

浅川は扇状地を形成しながら徐々に南に移り、現在はその南端を流れていて、この遺跡の南600mにある。

- (註1) 「浅川の歴史」森和敏 『あさかわ』浅川中学校PTA 1988
- (註2) 「条里地域の自然環境」 高木勇夫 1985

第3節 歴史的環境

(1) 歷史的環境

下長崎遺跡で検出した主な遺構は古墳時代後期と奈良時代、平安時代の集落遺構及び平安時代 後期かそれ以後の条里型土地割に関係する道があるので、これらに関する歴史的環境について説明する。

古墳時代の集落分布については、甲府盆地では不明な点が多く、この東部でも同様である。 下長崎遺跡付近では遺物分布調査で後述するように若干発見された。古墳分布の概略は甲府盆 地では大きくは西部、北部、東部の三分布域があり、この遺跡がある東部では最も濃厚で、広く分布している。発掘地点付近では、古墳は南100mに樹塚(荘塚)古墳が、東100mに物見塚古墳があり、かってあったと言われる(永井矢崎従道氏の父が削平したという)無名墳が北東50m(1753、1754番地荒神社地)にあり、今は全壊して不明であるが、馬見塚という小字名が残っているので北200mの付近にも古墳があったと考えられる。これらのうち樹塚(荘塚)古墳は横穴式石室をもつ古墳では初期に築造されたと考えられており、6世紀前半中頃に比定されている。その他の未確定のものを含む3基も地域的にみて後期古墳であろう。6世紀中葉は新旧首長層が交替しその中心地は甲府盆地南東から北東へと漸次移ったと考えられており、古墳の分布も後期になると大勢は浅川以北の諸扇状地に移る。この時期から扇状地は急速に開発が進み、農業生産力も著しく高まったと思われる。

平安時代の集落分布についても、古墳時代と同様不明な点が多い。一般的には平安時代後期には盆地全域にわたって遺跡が拡散し、かつ濃密になると考えられ、山間部にまで多く分布するようになる。下長崎遺跡周囲にも広く分布し、遺跡付近にも濃厚に散布しているが、このことについては後述する。浅川・境川扇状地の条里型地割が本遺跡付近まであり、その関係については第五章のとおりである。

(2) 発掘地域おける遺物分布

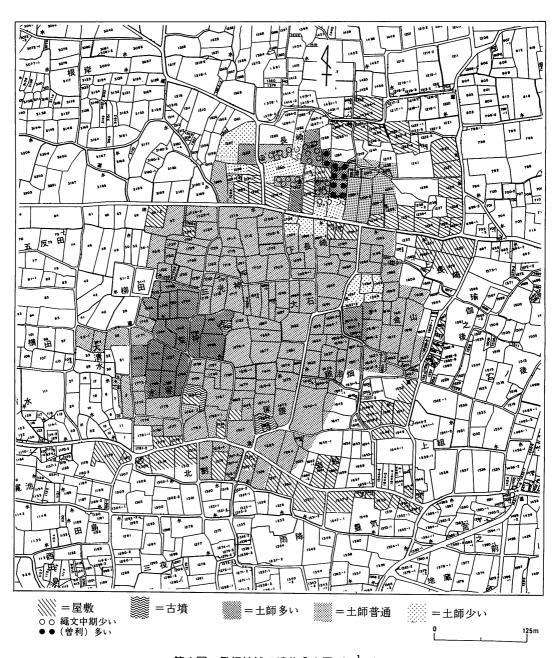
この遺跡周囲の地表面に散布する土師器は古墳時代から平安時代(鎌倉時代以後も含まれる可能性はあるが)までの間に比定されるものがある。分布域の範囲は今回と三光神遺跡を発掘調査(世元)際のものを合わせると、南北500m以上、東西400mくらいであろう。この範囲の北側は長崎集落があるため、地表面の分布はわからないが、五里原遺跡まで続く可能性もあり、南側では永井区小字岩船、豊気、雨降まで続き、一部では更に広がる。ただ前述した2遺跡の時代が違うように、その範囲内でも集落が移動しているものと考えられ、場所によって、遺跡の時期差はあろう。またこの範囲内でも土器分布の濃淡があって、大きく3ヵ所に分けることができ、その1は主に平安時代後期の下長崎遺跡、その2は東南50mにある金山遺跡(仮称、時期は特定出来ない)、その3は南西100mにある古墳時代後期(鬼高期)を主とする三光神遺跡である。ただ地表面に分布する土師器は、三光神遺跡のように上流からの押し出しによって移動したことも考えられるので、遺跡であるかどうかは確実ではない。

下長崎遺跡に分布している遺物は中期縄文式土器と土師器である。

中期縄文式土器は南区小字長崎1268、1282、1272番地付近に集中して、100mくらいの範囲で、 ほぼ円形に散布している。かつてここから曽利式の甕(八代町郷土館所蔵)が出土したことがある。

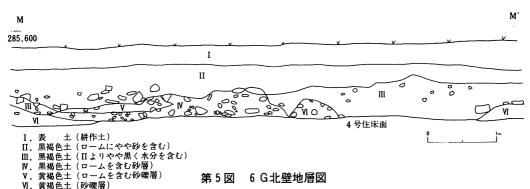
土師器は今回の発掘地を南限として、条里型地割の道路(町道51号線)を越えて、南北150m、東西150mくらいの範囲に濃く散布していて、この地域外へも広がっている。土器の時期は古墳時代初頭の五領式から後期の鬼高、平安時代の国分式までみられる。中でも国分式が最も多いので、発掘地の遺構が北側に広がっていることは確実であろう。

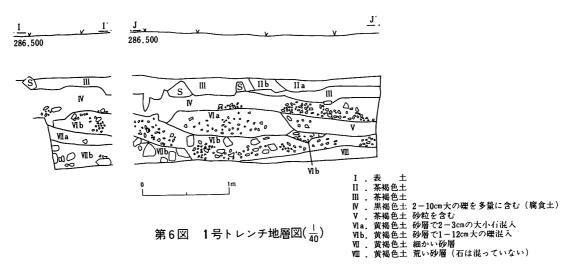
- (註1) 「三光神遺跡」八代町教育委員会 1987
- (註2) 「五里原遺跡」八代町教育委員会 1986



第4図 発掘地域の遺物分布図 $(\frac{1}{5,000})$

第3章 遺跡の地層と文化層





本遺跡が位置する浅川扇状地扇端の表層地層は耕作土(表土)、小礫を含む氾濫層や腐食土層などで構成されている。遺構は表土の下の黒褐色土層に包含され、これを掘込み面として、包含層の深さは地表から約50cmから約120cmまでである。

表土下の地層は不整合であるため標準層序は決められないが、地表の耕作土が約20cmで、その下層が小礫を含む黒褐色腐食土層の遺構包含層(50cm \sim 120cm)があり、その下層が大小の礫を包む砂層の氾濫層となり、この地表からの深さは60cm \sim 130cmである。おおよそ氾濫層は下方になるにしたがって深くなる。

氾濫層(土石流)の状況は第1 Gで深堀りしたトレンチの地層図(第6図)のとおりである。 その直上に古墳時代から平安時代までの遺構包含層があるから、氾濫層は古墳時代直前に形成されたものと考えられる。遺構包含層の状況をみると、2 号住居址、4 号住居址などを埋没した地層のように、上方から相当な力によって押し流して、住居址内に堆積したようである。これは前述したように「流水堆積に近い状態で形成された泥流舌状地」的地層のように考えられる。第1 Gから第10G付近までは遺構の掘込面は黒褐色土で、その下層の氾濫層まで掘っている。

第11Gから第15Gでは遺構の掘込は下層の氾濫層まで至っていないので、その包含層は黒褐色 土層中にある。しかしその掘込面は深く、地表下120cmくらいである。第11Gで検出された石組 の水溜状遺構も黒褐色土層中にあり、条里型地割の畦畔(道)はこの上に構築されている。

第4章 遺構と遺物

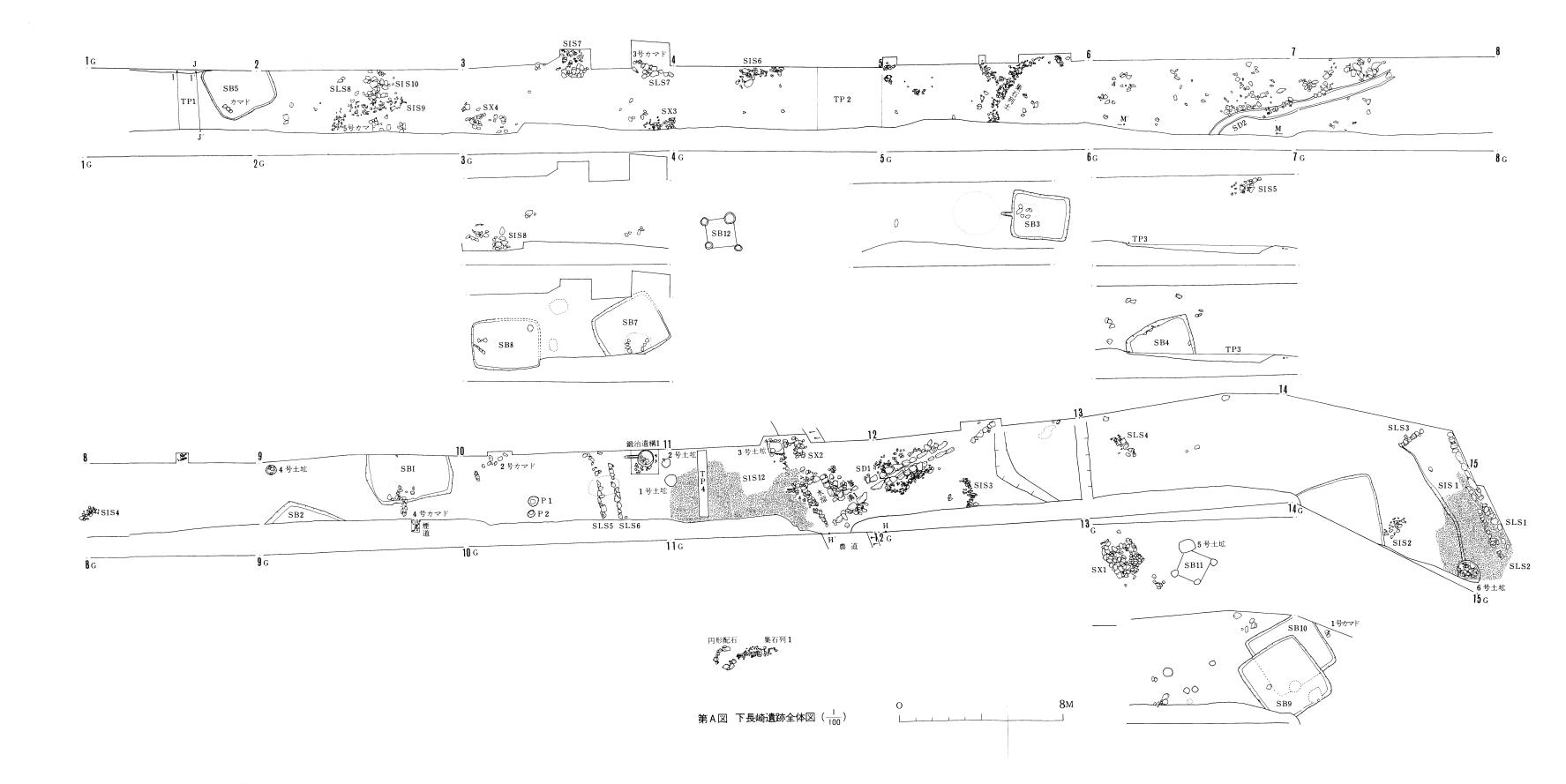
古墳時代および平安時代の遺構と遺物を、また奈良時代かと思われる遺構と遺物を若干検出した。この他に若干縄文時代中期の土器と石器、弥生式土器数個が出土した。その他時期不明の集石や土壙を数基検出した。遺構から出土した遺物でその時期を判定すると下記のとおりであるが疑問を有するものもある。古墳時代の主な遺構は後期の鬼高式土器を伴う堅穴式住居址3軒、堀立柱建物址2棟、配石遺構3基や土壙等を検出した。奈良時代では遺物と遺構包含層の状況により、1号、2号、9号住居址を疑問もあるが一応この時期とみなす。しかし1号、2号住居址は平安時代初期とみることもできよう。平安時代の主な遺構は10世紀後半から12世紀前半に比定できる遺物を伴って、堅穴式住居4軒、石垣3基、石列2基(石垣か)、集石列1基や配石土壙、鍛冶遺構のほか、数基のかまど址などや石垣などの石組遺構が故意に破壊された跡、と考えられる集石、捨てたと考えられる石が累積したところなど、人為的に散乱させたような石群も数箇所あった。遺物は土師器、土師質土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄製品などが出土し、この中でも貴重品とされる緑釉陶器が7個体、鉄鏃など特殊な遺物が出土している。平安時代の石組遺構や特殊な遺物が検出されたことは、単なる集落遺跡ではなく、荘園の中心的な遺構か土豪の屋敷跡などが想定される。この他中世の所産かと考えられる内耳土器、石臼、三足の線香立や白磁等が主に10G~14Gで若干検出されたが、遺構との関連はないと思われる。

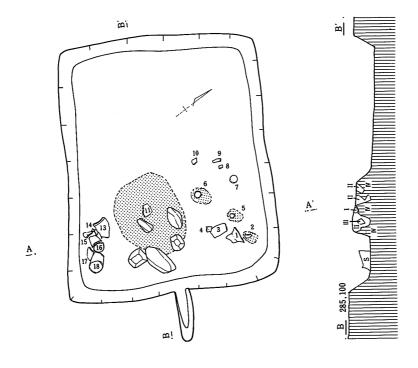
第1節 古墳時代

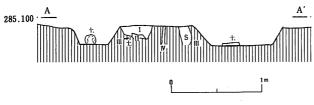
発掘区の西側である11G~15Gに遺構、遺物が多かったが、4G~5Gでも検出した。遺構は3・6・10号住居址3軒と11・12号掘立柱建物址2棟、配石が1号・2号の2基、土壙が1号~4号・6号の5基、鍛冶遺構が1基、集石列が1基(2号)、粘板岩を小石で囲んだ遺構の1基を検出した。遺構の時期はそのほとんどが古墳時代後期の鬼高式期に属する。遺構包含層は、13・14Gでは地表から120cmくらいあり、五里原遺跡や三光神遺跡と同程度である。

竪穴住居址

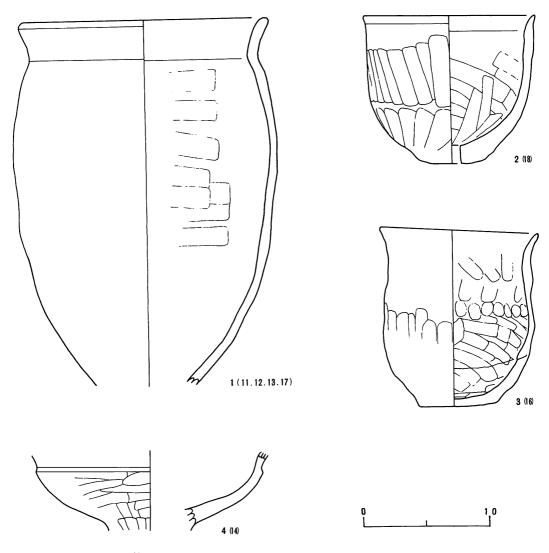
3号住居址 大きさは東西2.85m、南北2.35mと小型で、深さは15cmである。柱穴は床面に検出されなかったので、さらにこれを削り取ってその下層を調査したがなかった。かまどは東壁中央に石を芯として、粘土を積上げて構築され、煙道が住居址外に60cm掘られている。出土遺物は多く、中でも東南の隅には完形の甑1箇、甕1箇と甕の破片が出土した。なお西壁外の北側が約70cm×90cmの範囲で固く踏み締められていたので、出入口と考えられる。



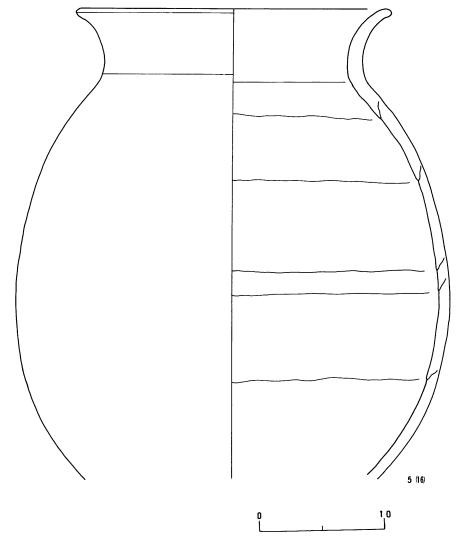




第8図 3号住居址実測図(1/40)

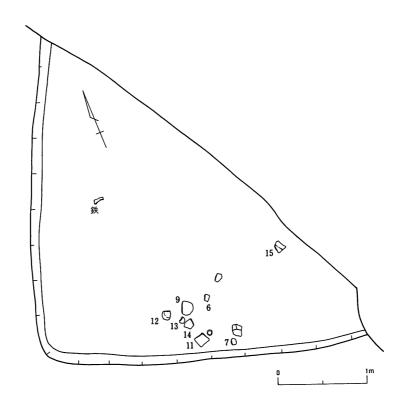


第9図 3号住居址出土遺物実測図 (5.6G) (1/3)

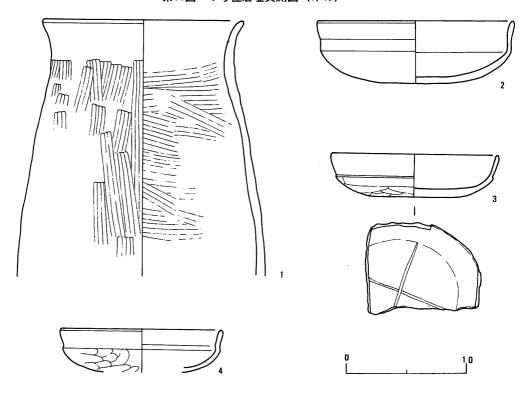


第10図 3 号住居址出土遺物実測図 (5 · 6 G) (1/3)

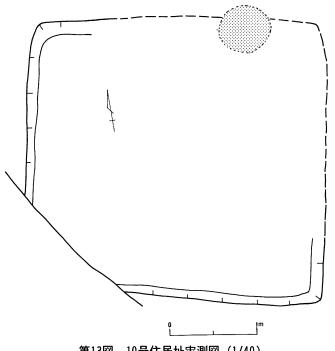
6号住居址 大半が路線外に出ているため、その大きさは不明であるが、発掘した範囲は東西 3.5m、南北3.5mで、深さは20cmである。柱穴とかまどは検出できなかった。遺物は鬼高式期の 婉等が出土した。



第11図 6号住居址実測図 (1/40)



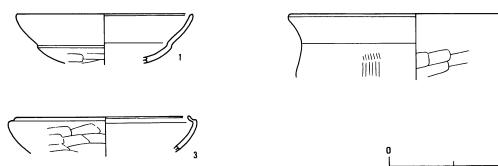
第12図 6号住居址出土遺物実測図(14G)(1/3)



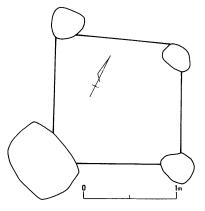
10号住居址 9号住居址に 切られ、撹乱されていたため に、そのほとんどが形態を留 めていないが、大きさは9号 住居址とほぼ同じである。遺 物は鬼高式土師器の坏や甕な どが少量出土した。

10

第13図 10号住居址実測図 (1/40)



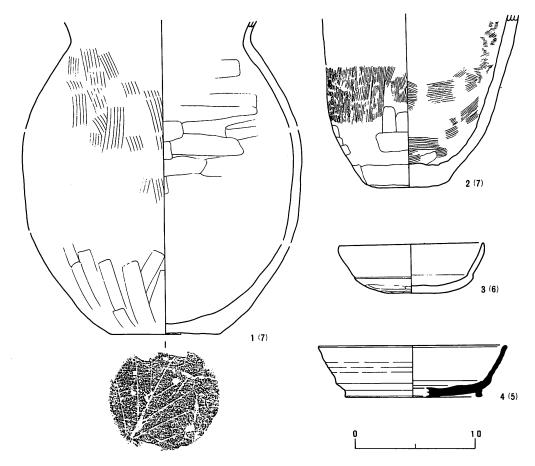
第14図 10号住居址出土遺物実測図(13·14G)(1/3)



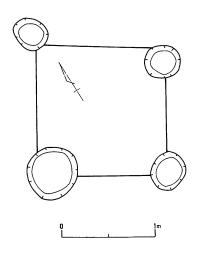
第15図 11号掘立柱建物址実測(1/40)

堀立柱建物址

11号堀立柱建物址 不整形な4本柱の小さい建物で ある。柱穴の1つは土壙によって破壊されている。柱 穴の掘込面と同一レベルで東50cmから鬼高式甕と坏が 出土した。



第16図 11号掘立柱建物址付近出土遺物実測図(13G)(1/3)

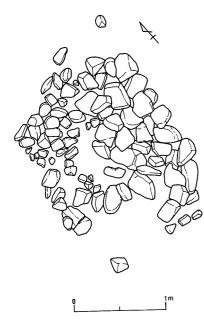


第17図 12号掘立柱建物址実測図 (1/40)

12号掘立柱建物址 不整形な 4 本柱の小さい建物である。柱穴は10cm \sim 15cmと浅い。5 Gで同一レベルの鬼高期のかまどを検出したので、同一時期とした。

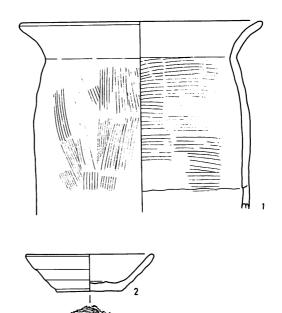
配石遺構 土壙 鍛冶遺構 粘板岩を囲む配石 その他

1号配石遺構 13Gで、地表下1.2mの深さで検出された。 $9 \cdot 10$ 号住居址、11号堀立柱建物 址と同一レベルであるので、遺物が伴出しなかったが、これらと同時期とみなした。石敷の範囲 は南北2.4m、東西1.6mで、東半分は25cm ~ 35 cmの比較的大きさの揃った石を、平の面を上にして、東側の面を揃えて密に敷きつめ、西半分は10cm ~ 20 cmくらい小石を乱雑に敷いている。なおこの下層は砂礫層である。

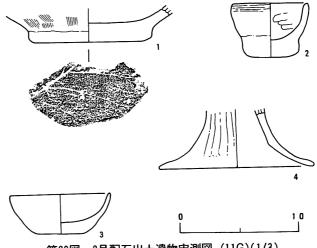


第18図 1号配石実測図(1/40)

2号配石 11G南側で、3号 土壙と円形配石との間で検出した。直径約25cmの自然石を囲むように、15cmくらいの自然石を囲むけらいに置かれていたが、この間には石が散乱していた。の間には石が散乱していた。南側の未掘地域に遺構が延長ある。大坂の掘込面と配石上面と動物は第20図のように古墳時である。強物に比定できる甕の底部や高杯の却が出土した。



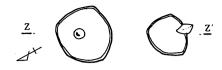
第19図 1 号配石出土遺物実測図(13G)(1/3)

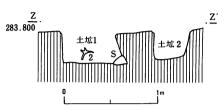


第20図 2号配石出土遺物実測図(11G)(1/3)

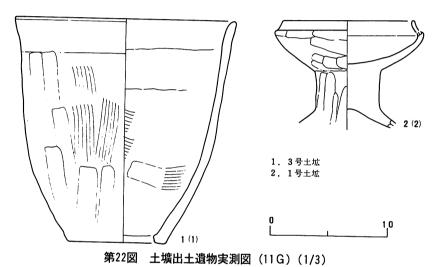
1号土壙 $11\sim12G$ で検出した。形は円形で、直径70cm、深さ35cmである。高坏が逆位に埋納されていたので、墓壙であるかもしれない。

2号土壙 1号土壙の南で検出した、直径38cm、深さ約30cmの円形で、掘込面は1号・3号土壙とほぼ同じである。 遺物は出土しなかったが性格は2者と同じであると思われる。

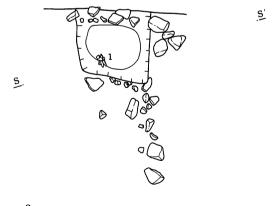




第21図 1号土壙 2号土壙実測図(1/40)



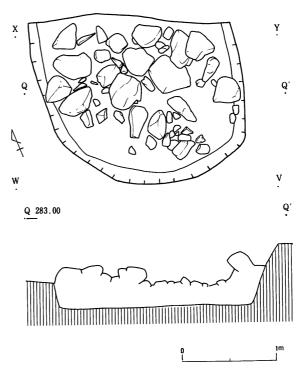
3号土壙 11 G 南側で、2号配石に接して 検出した。形は上場が方形、下場が円形で、 直径75cm、深さ32cmである。この上層の掘込 面より上に集石があった。中には第23図のよ うに甑が横転したように埋納されていたので、 墓壙であろうと考えられる。



283.800 1

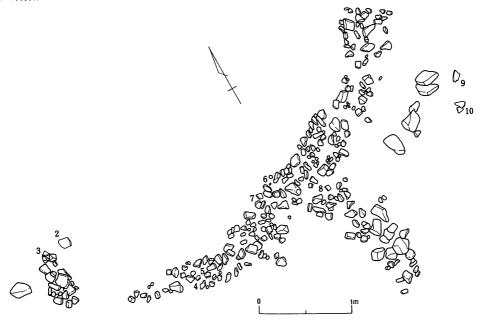
第23 3 号土壙実測図(1/40)

6号土壙 15G北側で検出した。 3分の1は路線外にあったために 発掘できなかった。形は不整な円 形で、直径は約1 m、深さは約35 cmである。上層には直径15cm前後 の石が乱雑に置いてある。墓壙で あろうか。

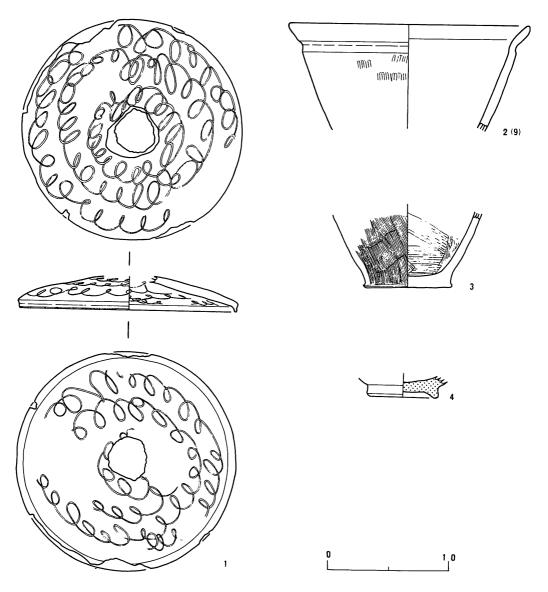


第24図 6号土壙実測図(1/40)

2号集石列 5 Gで検出した長さ5 m、巾30cm、高さ15cm位いの2股の形状をした性格不明の遺構である。拳大前後のほぼ円形の小石を乱雑に積み上げている。両側の発掘範囲外に延長しているが暗渠配水施設とも思われない。

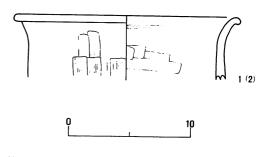


第25図 2 号集石列実測図(1/40)

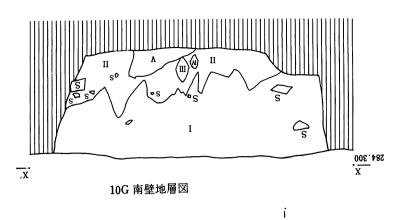


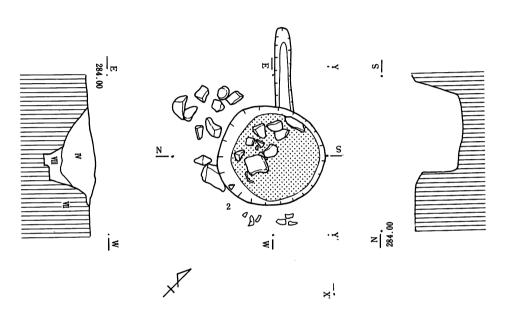
第26図 2号集石列付近出土遺物実測図(5G)(1/3)

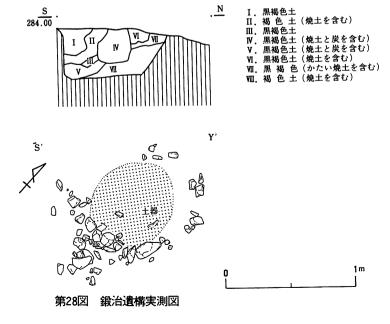
鍛冶遺構 10G南側で検出した。そのほとんどの部分が路線外にあったが、地主の了承を得て一部分を発掘することができた。遺構は円形の掘込部から細長い溝が突出している。円形部には5~20cmの石が焼土を囲むように散乱していた。円形部には炭を含む真赤な焼土が30cmくらい堆積し、その周囲にも厚い焼土がみられた。遺構は全体を調査できなかったためもあって、その遺構を充分肥握できなかった。遺物は1m以内の範囲で鉄屑



第27図 鍛冶遺構出土遺物実測図 (10G)(1/3)



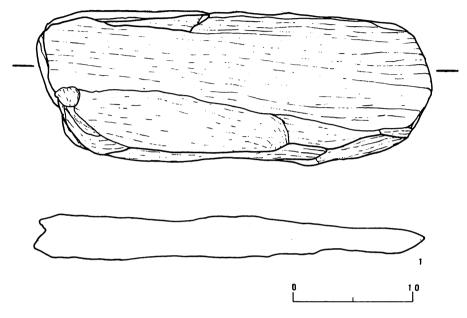




.<u>N</u>

や少量の土師器を検出した。

粘板岩を囲む配石 5 Gで検出された長さ40m、巾20m、厚さ3 cmの粘板岩が、6 個の拳大の 礫が円弧を描くように並べられた中にある。その北に3 個の鬼高式坏が置かれたような状態で検 出され、周囲からも鬼高式土器が出土した。



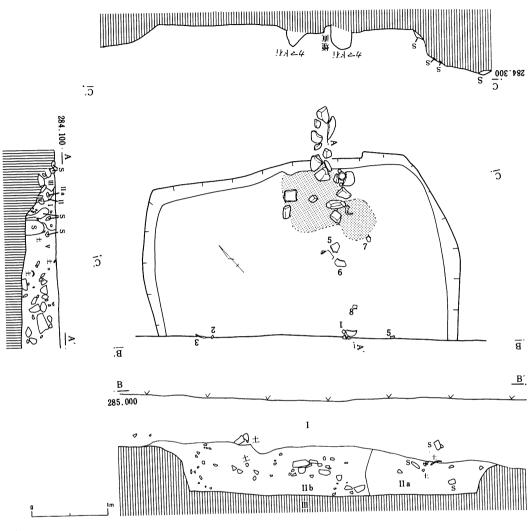
第29図 5 G出土遺物(粘板岩)実測図(1/3)

その他 3号住居址と粘板岩の間に、人頭大の石の集石があり、その下層に炭化物が直径2m くらいの円形に厚く堆積していた。また4Gに、明治時代の墓があり、これを改葬するために遺族が立合いのもとに、農林水産省笛吹川農業水利事業所員が重機で発掘した下層より、鬼高式土器を伴ったかまど址が発見され、また10号住居址が発見された。また10号住居址の南と西にも破壊されたかまど址を各1基づつ検出した。

第2節 奈良時代

竪穴住居址

1号住居址 大きさは東西4.25m、南北は南側が路線外に出ているため不明である。深さは比較的深く66cmである。柱穴は検出されなかった。住居址の周囲には小礫を混入した粘質土で固められた帯状の周堤らしい部分が西側にあった。かまどは石を芯として北辺にあり、煙道は石を2列に並べて構築してある。覆土には大小の礫が混入して押し出した地層のようになっていた。遺物は少なく甕の破片が1点出土しただけである。

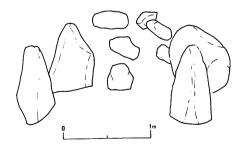


1 号住居址実測図 (1/40) 第30図

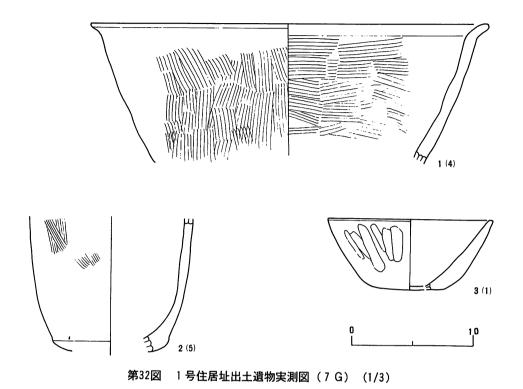
A-A'
I層 黒褐色土 焼土、粘土、小群を含む
II層 黒褐色土 焼土、粘土、砂を含む
III層 茶褐色土 砂層、小礫を含む
III 層 茶褐色土 砂層
IV層 茶褐色土 少し粘土を含む
V層 黒褐色土 ナ小の礫を含む住居址霞土

B-B'

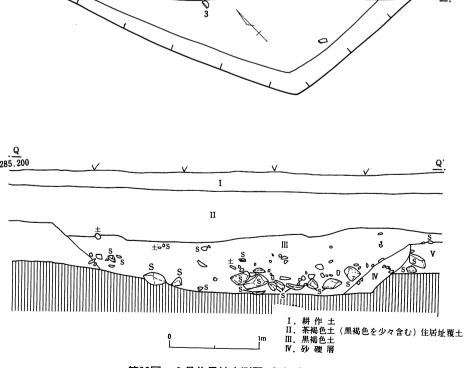
-B'
I、耕作上
II、黒褐色土大小の礫を多く含む
III。黒褐色土大小の礫をわずかに含む
「(住居跡履土) 1 号住



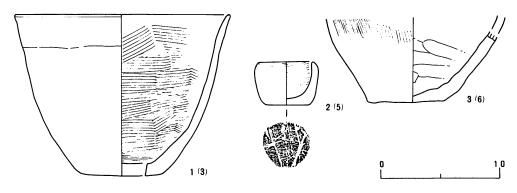
第31図 1号住居址かまど見取図



2 号住居址 9 G の北側で、わずかに隅が検出されただけで、大きさは不明である。覆土は 1

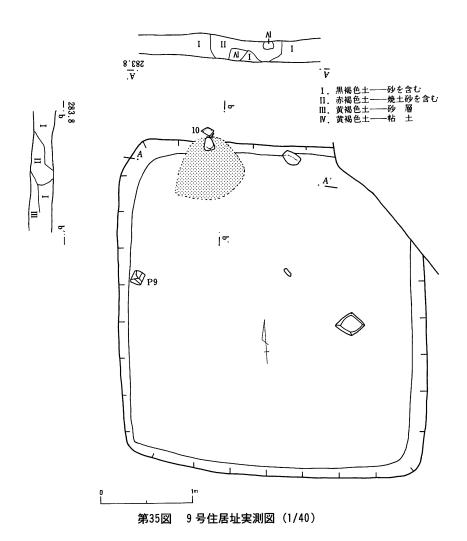


第33図 2号住居址実測図 (1/40)



第34図 2 号住居址出土遺物実測図(9 G)(1/3)

号住居址と似ていて、押し出したような地層である。遺物はこしきや手捏土器等が出土した。



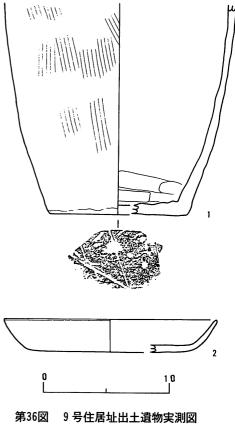
— 23 —

9号住居址 10号住居址を切って掘られている。 大きさは東西3.4m、南北3.6mで、北側で焼土と かまどを検出した。真間式の坏と甕の小破片が出 土した。

第3節 平安時代

遺構は発掘区の全体に分布しているが、1G~ 4 Gまでは特に多く、この時期のものだけで、し かも住居址が重複していたと思われる所もあった。 特徴として、石で形造られた遺構が多く、またこ れらが故意に破壊されたらしい痕跡や、遺構を破 壊した石を集めたり、積重ねたような集石も異状 に多かった。

遺構数は4・5・7・8号住居址4軒と、1号 円形配石、3・4号配石の3基、列石が1~8号 の8基、土壙が5号の1基、石組の溝が1基、集 石列が1・2号の2基で、集石は9ヶ所あった。 その他撹乱されていたため住居址が検出できなかっ たかまどが4基あったので、遺構数は平安時代の ものが最も多い。

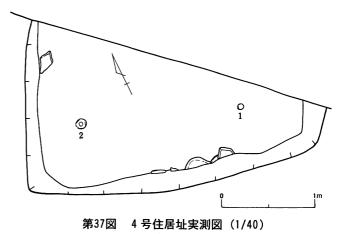


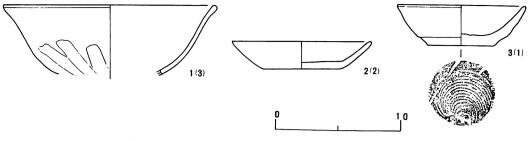
 $(13 \cdot 14G)$ (1/3)

竪穴住居址

4号住居址 6Gで検出した。発掘したのは3分の1ほどで、他は路線外に出ていた。大きさ はその南辺が3.2mである。住穴は検出できなかった。遺物は少なく、坏の破片3個とその小破 片が少量出土しただけであった。

第38図の1や3に示した坏は本遺 跡で出土した土師器の中では終末 期のものであろう。11世紀~12世 紀に比定され、下長崎遺跡が廃絶 する頃の住居址と考えられる。

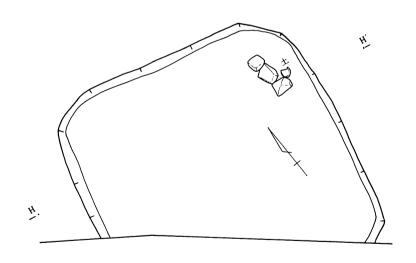


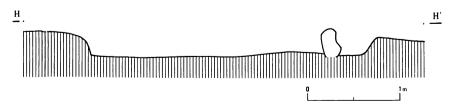


第38図 4号住居址出十遺物実測図(6G)(1/3)

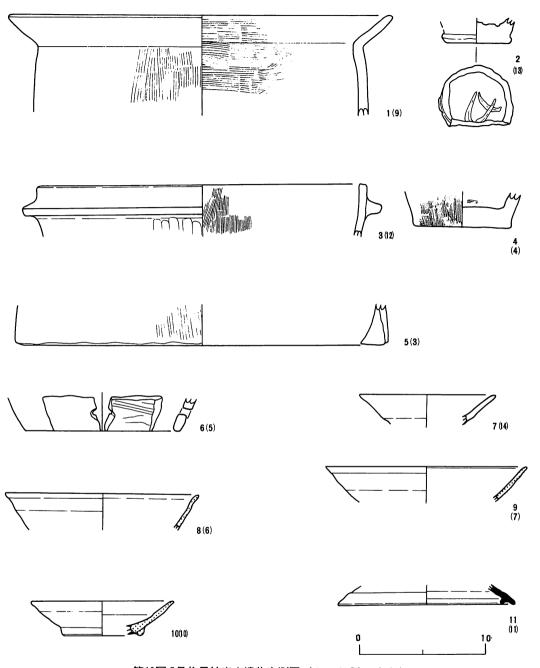
5号住居址 東端の1G~2Gで検出した。南側4分の1が路線外に出ている。東西の長さは 2.9mで北東の隅にかまどがあるが、袖石の片側は抜き去られていて、耕作によって破壊された ためか煙道は検出できなかった。遺物は多く、土師器の他に須恵器と灰釉陶器も出土している。 1はやや古手の甕の口縁で、3は羽釜、5は置きかまどの底部と思われる。2は土師器の底部で、底に「か」かと思われる陰刻がある。時期は平安時代中期10世紀に比定できよう。

7号住居址 3 Gから 4 Gにまたがって、その北側で検出した。北側の一部は路線外にあるために調査ができなかった。また南西隅は撹乱されて壁はなかった。住居址全体は上層(表土)から撹乱されて浅く、10cm~20cmの深さである。プランは東西が3.1mで南北が2.8mである。北側





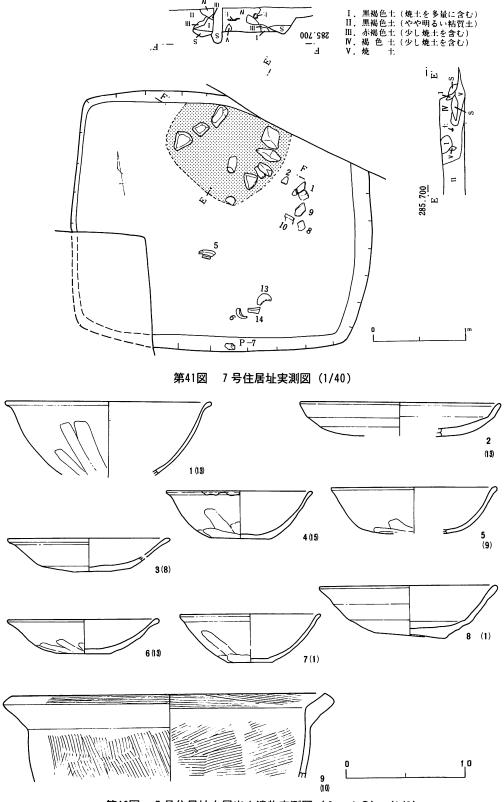
第39図 5号住居址実測図 (1/40)



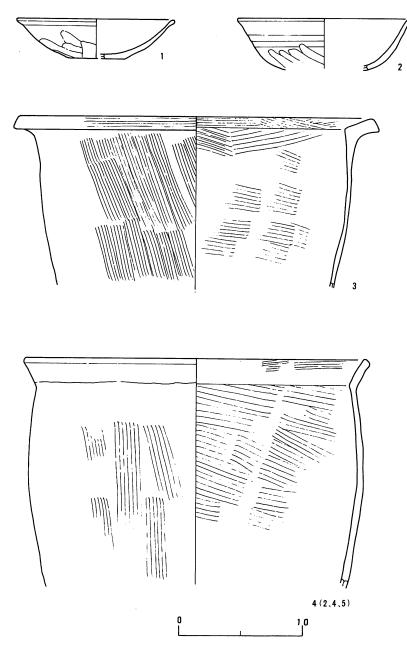
第40図 5号住居址出土遺物実測図(1・2 G) (1/3)

にかまどがあり、その両袖に使った石がよく残っていて、焼土も厚く堆積していたが煙道は撹乱のためか検出できなかった。かまどが北側にある住居址は古い時期に属するものが多いが、この住居址は新しく、10世紀後半から11世紀頃廃絶したと思われ、この遺跡では新しい時期のものである。

遺物は本遺跡では最も多く出土しており、挿図に示すように、住居址覆土上層と下層およびかまど内のものがある。上層から出土した土師器は坏が多く、深めで、口縁は発達した玉縁が多い。



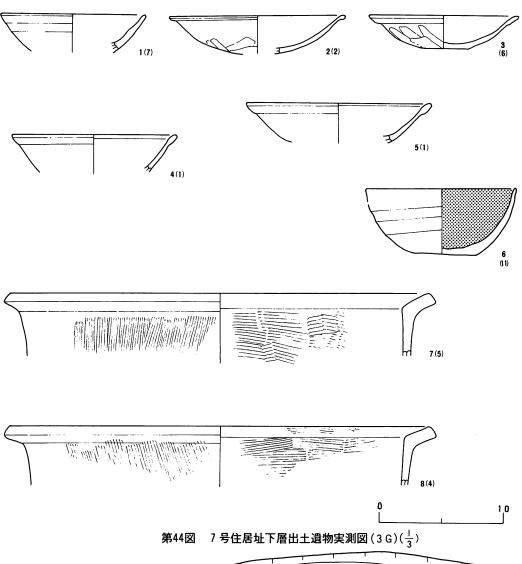
第42図 7号住居址上層出土遺物実測図 (3・4G) (1/3)



第43図 7号住居址かまど内出土遺物実測図 (3G) (1/3)

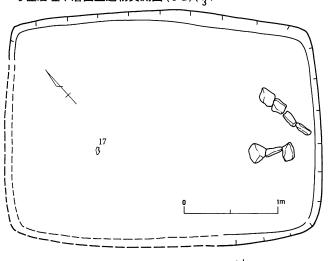
甕も新しく、遺物全体としては11世紀前半に比定できると思われる。下層から出土した遺物は第44図No.1 やNo.6 のように9世紀頃に比定される可きものもあるが、浅い坏などがあって、全体としては上層よりやや古手であろう。かまどから出土した甕の破片No.4 は3 片を接合したもので、9世紀に比定されると思われるが、その他の甕や坏は10世紀から11世紀のものと考えられ、この住居址が廃絶した時期を示すものであろう。

7号住居址は本遺跡で検出した住居址の中で後半のものであって、この時期に続く後の遺構は 2号かまどや4号住居址であろうか。



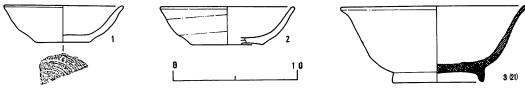
8号住居址 2G~3Gで検出した。北側は路線外に出ていたが地主にお願いをして、調査させていただいた。壁は削り取られて低くなっていて、南西の部分はなく、床面下の固い部分が残存していた。かまどは東側にあったが煙道は検出できなかった。北東隅から北側の上層には石組の遺構が破壊された痕跡が残っていた。

遺物は緑釉陶器と11世紀に比定



第45図 8号住居址実測図(1/40)

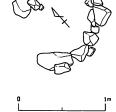
できる土師器の坏が出土した。緑釉陶器は後述するように美濃折戸53窯第5に類似しているので、 10世紀後半の所産と考えられる。



第46図 8号住居址出土遺物実測図 (3G)(I/3)

配 石

1号円形配石 11Gの南壁に接した所で検出した。上部には乱雑に置かれた集石があった。人頭大~拳大の石で、直径1.2mくらいの円を描くように並べられている。西側に接して検出された1号集石列と関係ある遺構かもしれない。



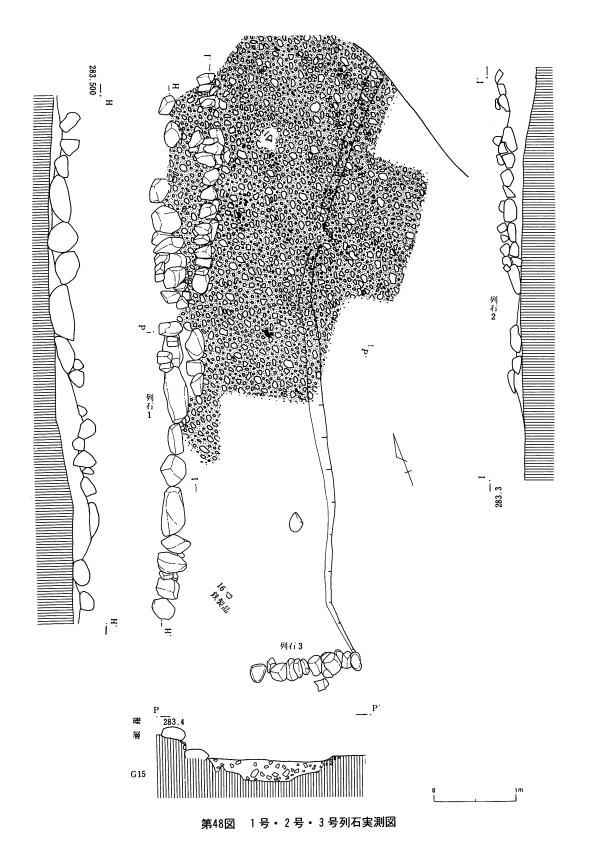
第47図 1 号円形配石 実測図 (¹/₄₀)

列 石

1号列石 発掘区の西端にある石垣で、上部が破壊されている。面は上流(東)にあり、2号列石によりやや下って積まれている。南端が切れているが3号列石に連結していたようである。下流部(西側)が10m四方くらい周囲より約30m高くなっているので、何らかの遺構であったと思われる。

2号列石 1号列石の東側直下にあり、上部が破壊されている。面は上流(東)にあり、前面 に1号集石が広がっている。この集石下は3号列石の前まで掘り込まれている。

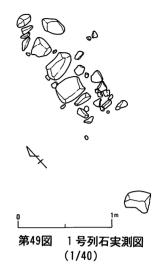
3 号列石 14Gにあり、1 号列石と直角に連結していたと思われ、面は北にある。上部は破壊されている。



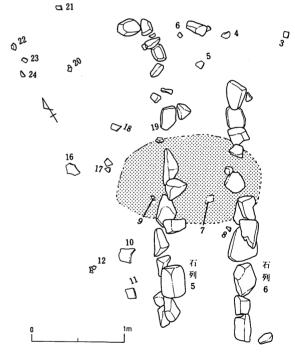
— 31 —

4号列石 13Gの1号配石直上から検出した。人頭大~30cmくらいの石が南北に、面を西に向けて一段で並べられており、その西側には小礫があった。列石は、破壊されたような状態であったので、おそらく延長するのであろうし、また上部にも積まれた石垣であったと考えられる。付近には平安時代の遺構は少なかったが、広い範囲に焼土や焼土塊が数カ所あった。

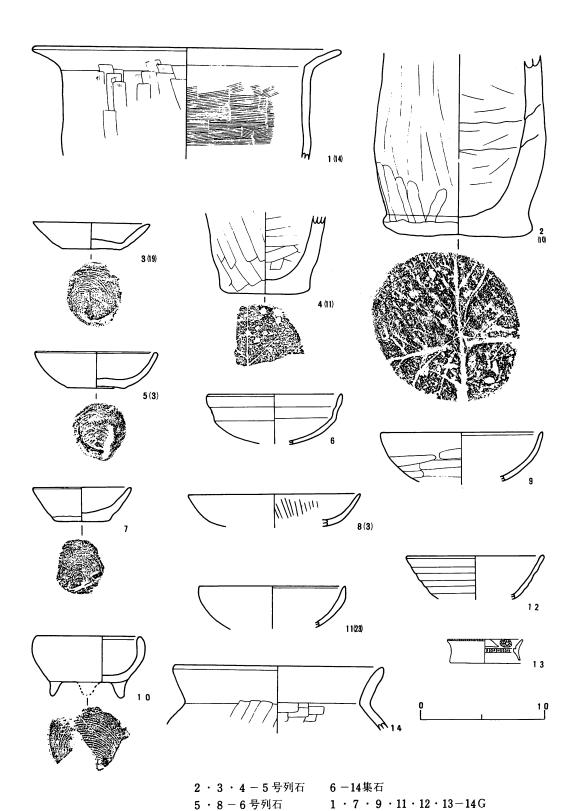
この遺構の伴出遺物はなかったので時期は確定できないが、1号配石の上層にあったことや周囲から出土した土師器の状況から平安時代後期のものと考えられる。



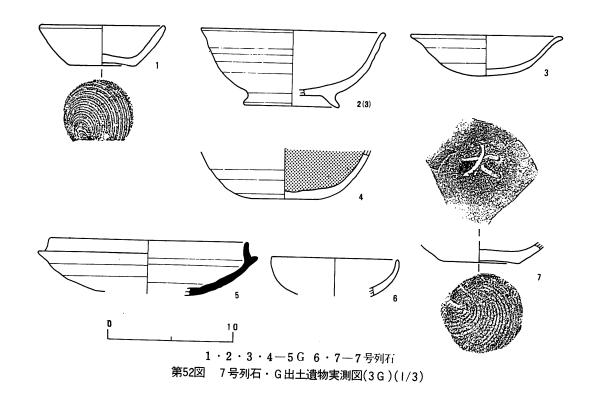
5・6号列石 10Gにあり、両者は約60cm離れて並列しており、上流(東)に面がある。現状は一段積みであるが、上部は破壊されたかどうかはわからない。破壊された可能性もあり、そうとすれば重箱積だったと思われる。発掘区外に延長している。中央部に厚い焼土があったので、この上で火を焼したものである。



第50図 5号・6号列石実測図(1/40)



第51図 5 · 6 号列石、集石、G出土遺物実測図

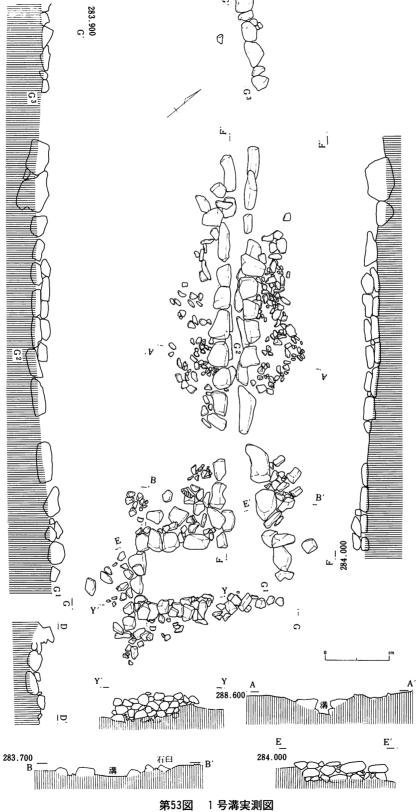


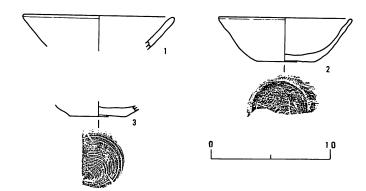
溝

1号溝 $12G\sim13G$ で検出した水溜と水路で、自然石によって構築されている。水溜の広さは東西74cm、南北2 m、深さ40cmで、東側は人頭大の石を乱雑に、南側と西側は20cm ~30 cm<50いの石を重箱積に積み上げている。三方にはそれぞれ裏込めの石をつめていて、西側の最上部に石臼(上臼)があった。溝部は長さ8.7m、巾10cm ~30 cm<50cm<50cm<50cm<6いの大きい石を立てたり、2、3段の重箱積にしている。上面の状態によって判断すると、上に1段から2段あったかも知れない。溝の上流部と中間が破壊された形跡があり、石組が欠けている部分がある。水は西に流していて、さらに路線外に続くと思われる。裏込の石は全体にはなく、中間部の西側だけにある。溝はその底から11世紀 ~12 世紀に比定される土師器破片が2個体出土したので、この頃に構築されたと考えられるが、前述した石臼は中世後半の所産と考えられるから、中世に構築されたものと考えられないことはない。なお掲載した実測図と写真は明らかに復元できる所を復元したものである。

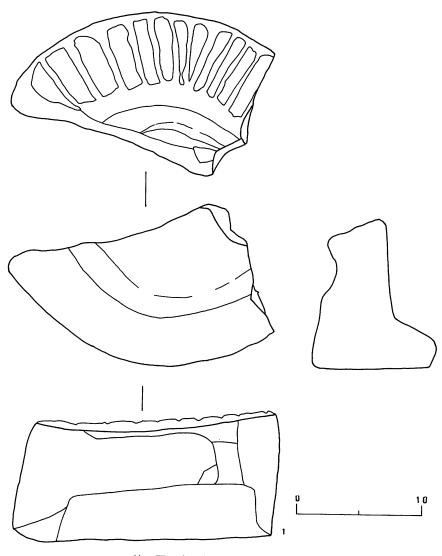
上流に設施された水溜には水口が検出されなかったので、この水溜の中に湧水があったものと思われる。浅川扇状地の扇端に近いこの付近には湧水を溜める貯水池があり、またこの遺跡と同じくらいの標高をつなぐ線上には、他に3ヶ所貯水池がある。これらには現在では湧水はほとんどみられないが、かってはあったというので、この線上にスプリングラインがあったと考えられる。

11Gにある水溜の上に、条里型地割を構成する道が南北に敷設されていて、その敷設時期が平安時代末より以後のものであることが明らかになった。

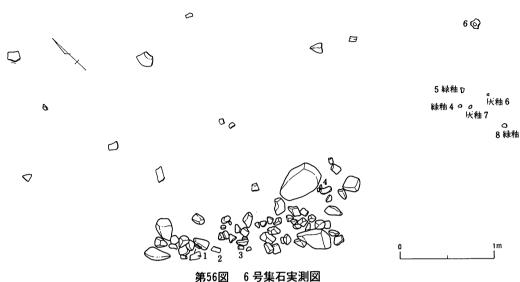




第54図 1号溝の下出土遺物実測図(12G)(1/3)



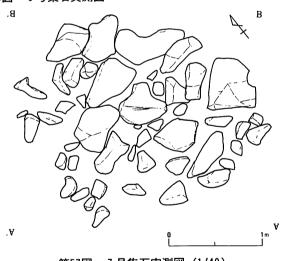
第55図 水溜付近出土遺物実測図 (11 G)



集石 その他

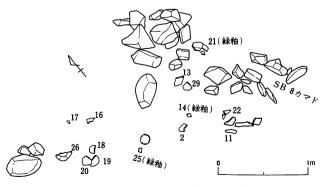
集石 破壊された石組遺構の石が 散乱しているようなものや、人の手 によって運ばれ集められたと考えら れるものを集石とした。このように 遺構として認められない集石が13ヵ 所あり、これらが全て平安時代後期 に属している。これらには遺物が伴 わないので時期が不明確な集石もあっ たが、周囲から出土した遺物や、近 くにある平安時代の遺構レベル等か らその時期を判断した。

破壊されたと思われる石組遺構は 1号集石から12号集石までの12基で ある。捨てられたような集石は1・ 11・12号集石の3基で前者よりも広 い範囲を占めている。なおこの他に も前述した集石に類似するものも数ヶ 所あった。

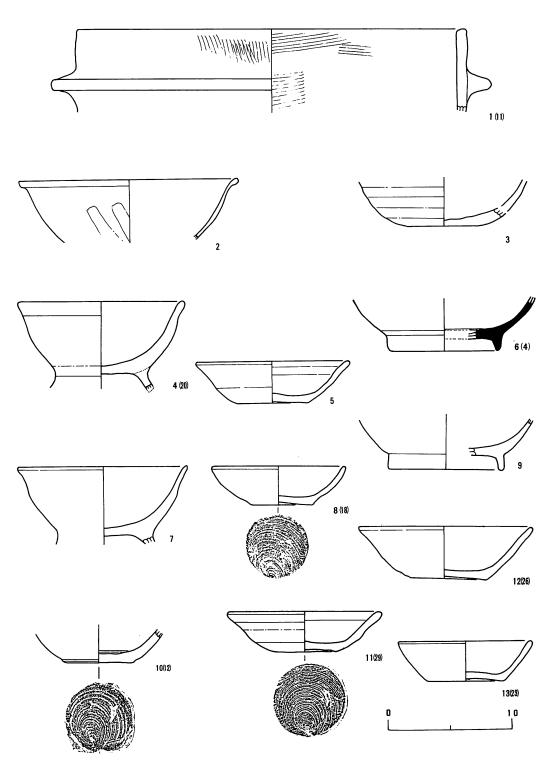


0

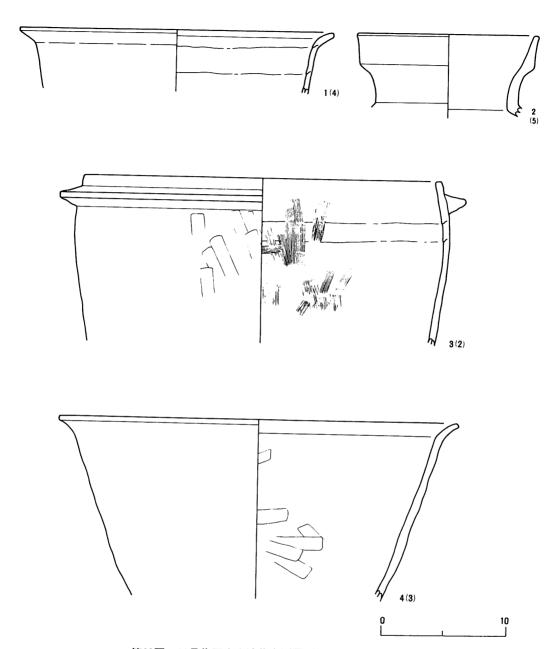
第57図 7号集石実測図(1/40)



第58図 8号集石実測図(1/40)



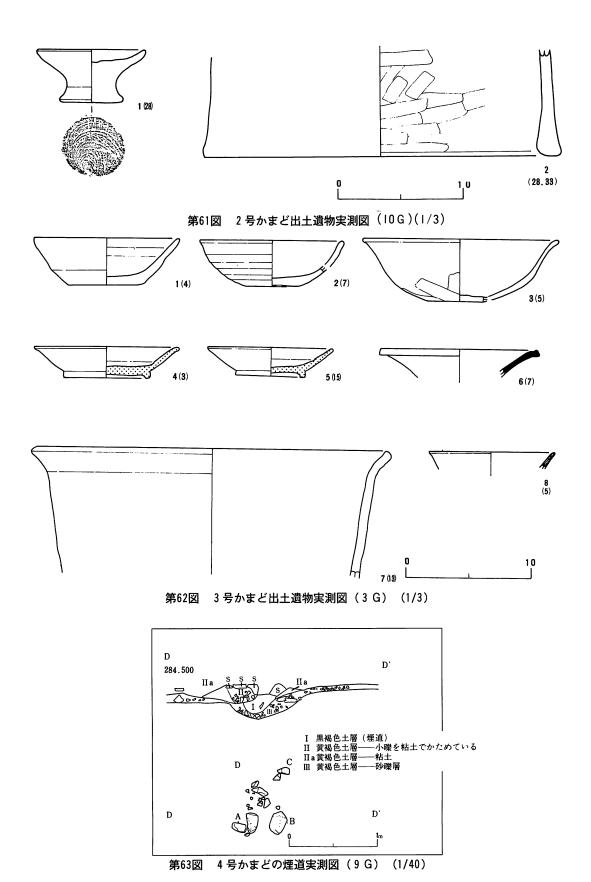
第59図 7号-8号集石出土遺物実測図 (3 G) (1/3)



第60図 11号集石出土遺物実測図 (1 G) (1/3)

かまど 発掘地区にわずかに入っていたかまどが南の境界線に接して3基、北に1基(煙道のみ)の計4基あったが、これに伴う住居址は検出できなかった。

かまどは、住居址の北壁か北東隅に多くあるために、南側の3基は住居址が検出できず、北側の1基は1号住居址によって破壊されたと思われる。2号かまどから出土した第61図の1は12世紀に比定される台付坏で本遺跡の住居址中の最終末のものである。かまどだけの遺構から出土した遺物はこの頃のものが多い。

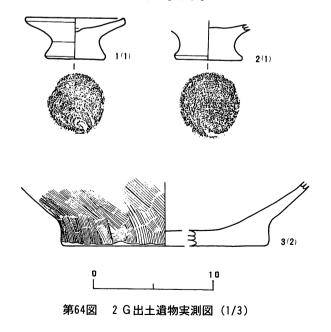


その他の遺物

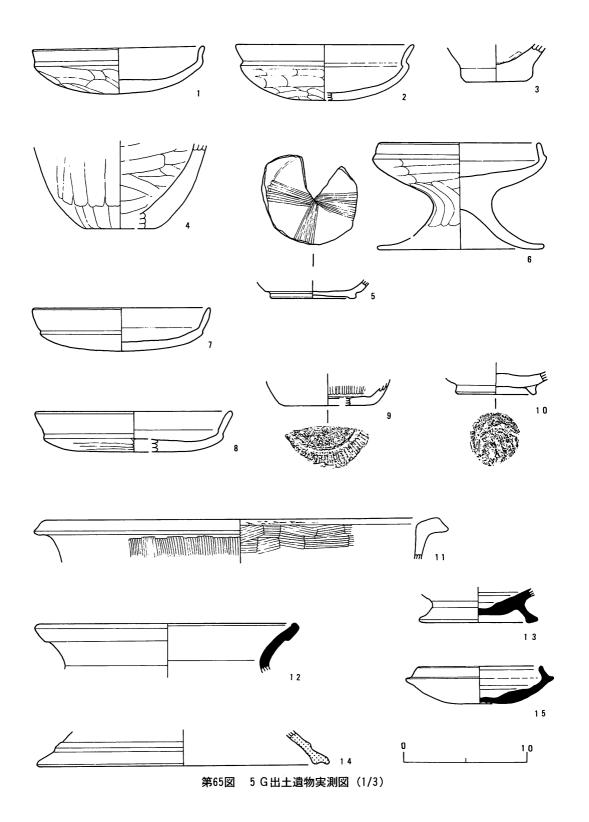
グリッド出土遺物 発掘区全体から遺構に伴わない遺物が多量に出土しているが地域的には1Gから7Gあたりまでが多い。そのほとんどは土師器であるが、前述した緑釉陶器と灰釉陶器や須恵器なども他に比較すると多いようにみられる。平安時代の土師器では、その前期のものもあるが、後期が多く、中でも11世紀を中心とする様相である。

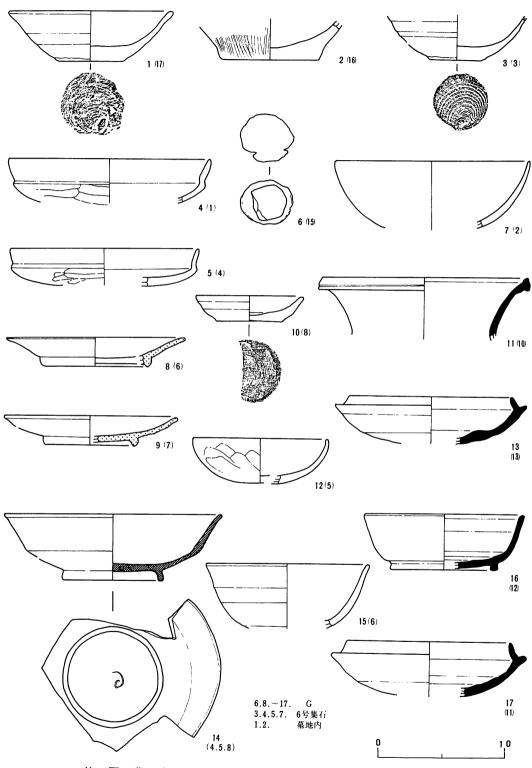
下長崎遺跡は検出した遺構の状況等から推測すると、人為的に破壊され、その時に廃絶した可能性が考えられる。その時期を推測する資料として、グリッドから出土した土師器、土師質土器を上げると次のようである。第20図 2 は器肉が厚めで、浅い土師質坏。第51図 7 は器肉が厚く、特に内面底部の立上りのようすは第 XV期(11世紀第 1 四半期)に比定できる 7 Gから出土した土師質坏である。第64図 1 、 2 は 2 Gから出土した土師質の台付坏で明らかに第51図 7 と同じ時期かやや前のものである。6 G上層から出土した第67図 1 、 3 、 7 は折り重なった状態で出土した完形品の土師質坏である。本遺跡中では最も上層で、破壊された石の遺構のような場所から出土した。時期は前者より後、即ち12世紀中葉あたりに比定できるかも知れない。7 Gから出土した第69図 3 は20図 2 に似ている。第71図 9 の土師質の坏は11世紀末か12世紀に、第73図 2 は中世の坏に似ており、第74図 3 と第75図 9 は13 Gから出土した坏で11世紀から12世紀に比定されよう。以上のように挿図に掲げたものだけでも多いが、小破片は更に多い。

また特殊な遺物としては、第20図 9、10、第75図 3、第76図 5 の土師器土製円板が 4 個、第56図 6 の土弾状のものが 1 個が出土している。また第74図 1 は12Gから出土した羽口先の破片で、固く焼きしまり、外側は溶融して自然釉のようなものが付着している。これは前述した鉄屑とも考えあわせると、鍛冶遺構があった証拠であろう。これら特殊な遺物はその時期が特定できないが、いずれも古墳時代から平安時代までの所産であろう。

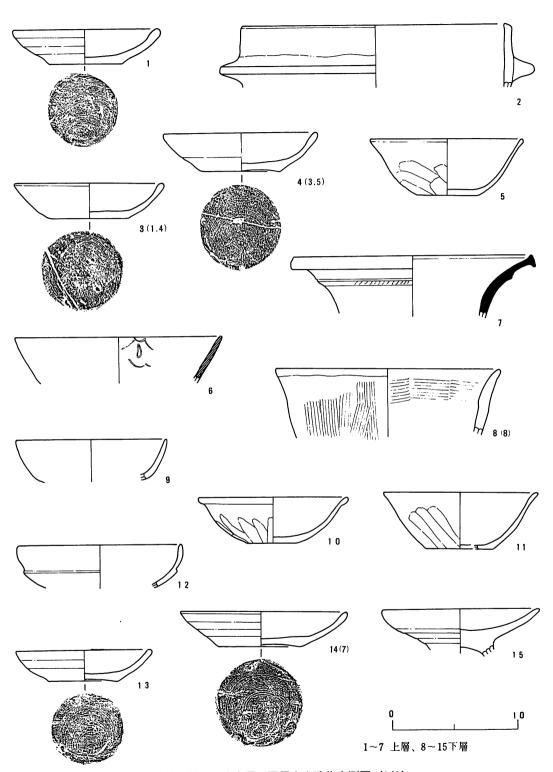


— 41 —

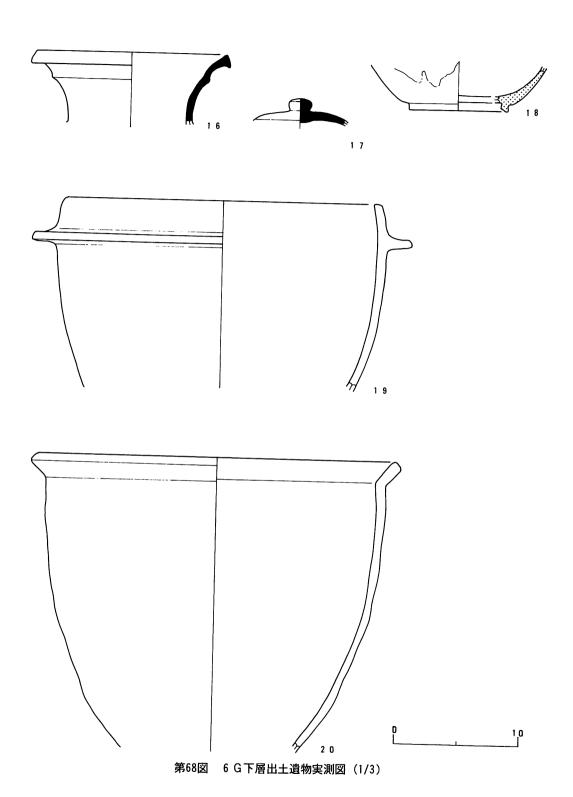




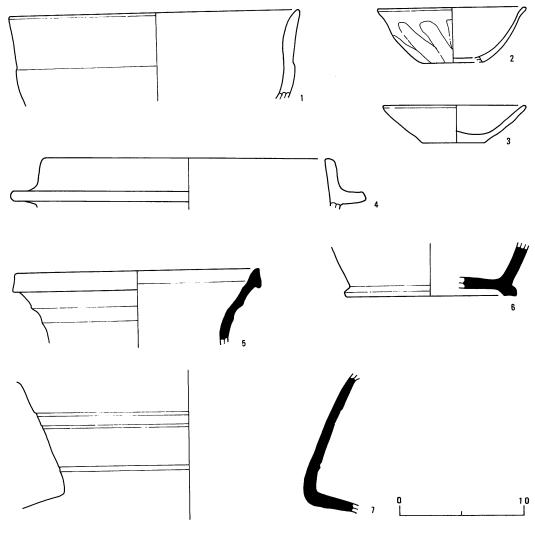
第66図 墓地内・6号集石・G出土遺物実測図(4G)(1/3)



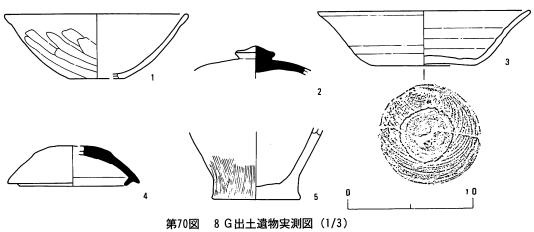
第67図 6 G上層·下層出土遺物実測図(1/3)

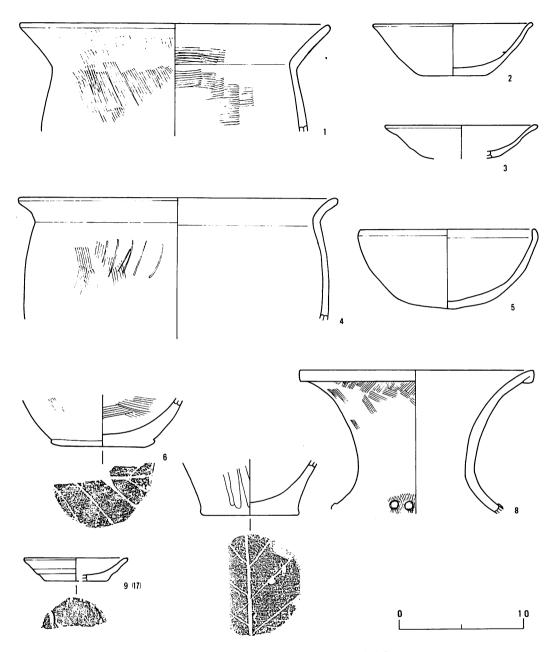


-- 45 --



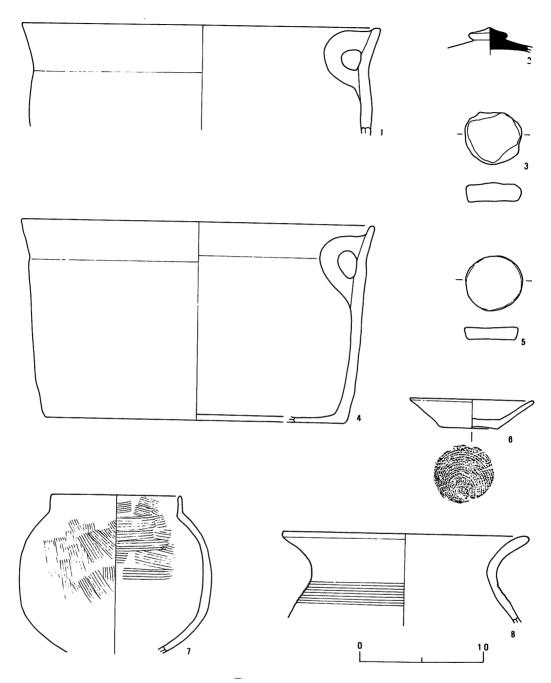
第69図 7 G出土遺物実測図(1/3)





第71図 9 G出土遺物実測図 (1/3)

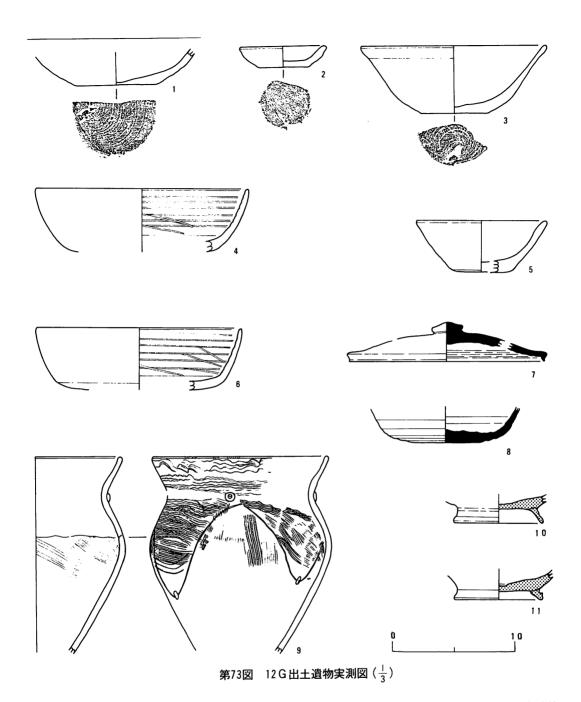
緑釉陶器 3・4 Gから集中的に出土したが、6・14 Gでも出土した。少なくとも9個体あり、このうち2個体は復元できた。復元できたもののうち1個は釉が班で、1部剝落しており、胎土は軟質(陶質的)で、淡灰色をしている。他のものは全て胎土は硬質(磁器質的)であるが、釉は緑色に濃緑色の班が混ざるもの1個体、緑色1個体(内面に線刻あり)、淡緑色1個体、茶緑色3個体、黄緑色1個体と復元できた深緑色の優品1個体(第66図14底に陰刻あり)。緑色に濃緑色の班が混ざる個体は、釉や素地が塩尻市平井遺跡出土の瓶や群馬県山王廃寺跡出土の手付水注に似ている。「日本の陶磁」(昭62、東京国立博物館)によると、前者は中国湖南省長沙官窯



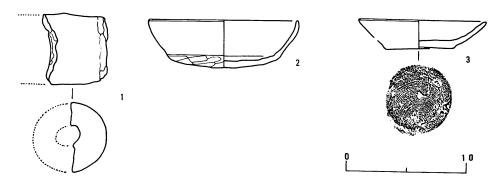
第72図 11G出土遺物実測図 (1/3)

の緑釉水注を彷彿させるものがあり、素地は黒灰色で、堅く、呈発も深緑色で、むらがあるが安定した施釉技術で、おそらく9世紀末から、10世紀にかけての作であろうとしている。後者については、中国四川省窯青磁を祖型に、10世紀に日本の緑釉陶窯で焼かれたものと考え、釉素地は固く、釉は暗い緑色に呈発したとしている。

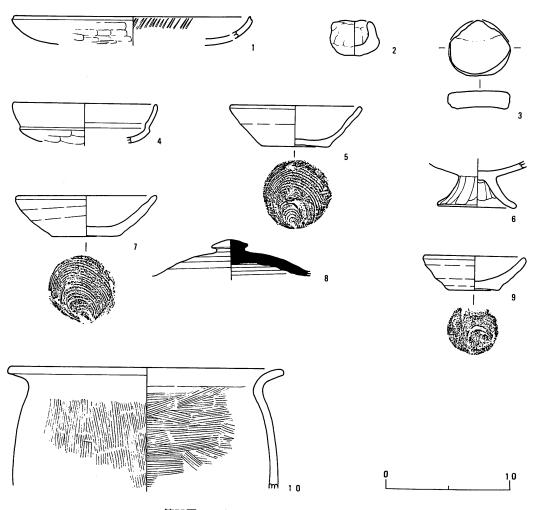
緑釉陶器は本県内でも出土しているが、その出土遺跡数や量は少なく、大泉村金生遺跡・寺所



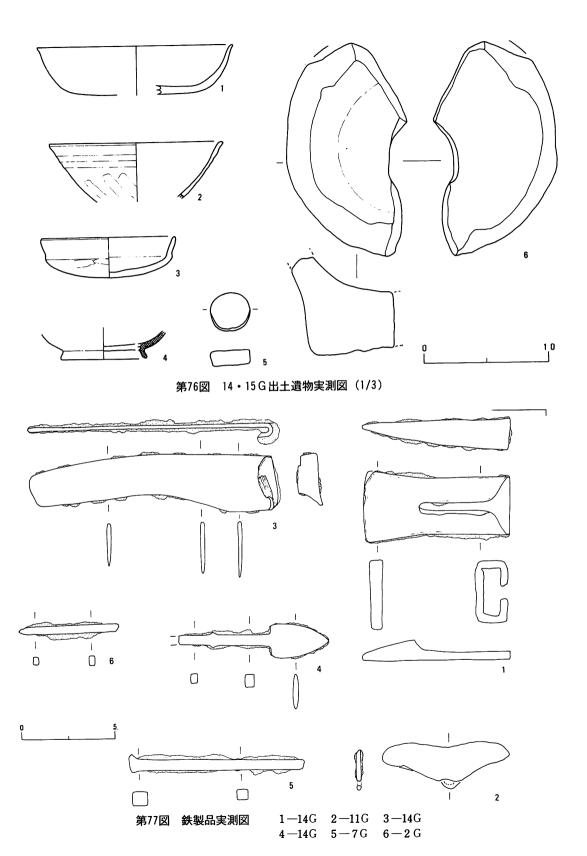
遺跡、須玉町豆生田遺跡、高根町湯沢遺跡、一宮町東新居遺跡・大原遺跡、甲府市桜井畑遺跡等があり、山梨市日下部遺跡、同江曽原遺跡でも、それらしいと思われるものが出土している (「日下部」昭62 山梨市教育委員会)。これらの遺跡では特殊な伴出遺物や遺構が検出され、通常の集落とは異なるものがある。



第74図 12·13G遺構包含層出土遺物実測図 (1/3)

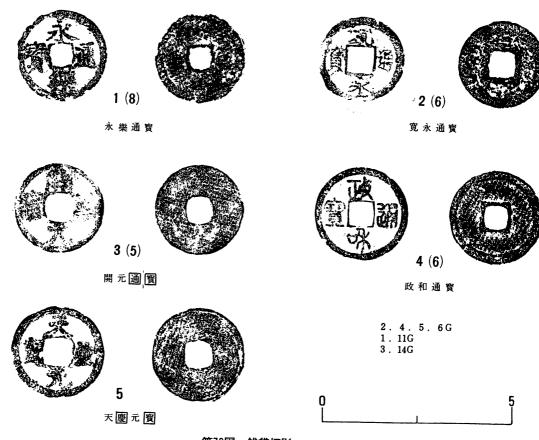


第75図 13G出土遺物実測図 (1/3)



第4節 その他

古墳時代~平安時代以外に縄文時代、弥生時代や中世の遺物が若干出土した。縄文時代では中期後半の曽利式土器片と粘板岩製石斧が出土した。これは下長崎遺跡の北に隣接する遺跡と同時期のものであるが遺構はなかった。弥生時代では11Gの北側発掘範囲に接して、後期前葉の箱清水式系に比定できる壷1個(第73図)が正位に置かれたような状態で出土したが遺構は検出できなかった。この遺跡の付近には三光神遺跡(1987、八代町教育委員会)や仮ノ下遺跡(1984、山梨県教育委員会他)、西蔵福遺跡などがあるがこれは終末期の遺跡で、後期前葉の遺物は出土していない。中世では11Gから内耳瓦器、1号溝付近から石臼、16Gから青磁、白磁、天目の破片



第78図 銭貸拓影

や銭貨などが出土した。ほとんどが発掘地域の西に偏って、土師器などとともに出土している。 銭貨は永楽通寳、寛永通寳、政和通寳の3個および開元通寳、天慶元寳とみられる2個が出土した。開元通寳は中国南唐の西暦966年以後、政和通寳は北宋の西暦1111年以後、天慶元寳は遼の 西暦1111年以後のものである。

内耳土器 (第72図) が 2 個体出土している。両者とも瓦質で、器形は口縁部が外反していて、No.11はやや浅めであろうか。「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」(茅野市 その 5 長野県教育委員会他 昭57『中世の遺物』小林秀夫)の分類によると、長野県地方では内耳 土器の口縁部が外反する器形は古い様相を示し、15世紀に比定できるとしている。

下長崎遺跡出土遺物説明表

挿図					法/口径\		調		整		胎色	土調		備	考
番号	出土地点	種類	器	形	量 (器高) 量 (底径)	外	面	内	面	底	焼	成		ym 	
第 9 1 図	S B – 3	土師	築		19.5 — —	ナデ整形		ナデ整形の ヘラ整形	の上を		や茶良	褐褐	い色好		
" 2	"	土師	飯		13.6 11.7 5.5	ヘラ整形		横ナデ			や茶良	や 粗 褐	い色好		
" 3	"	土師	小型發	E	12.6 13.9 6.3	指頭ナデ		ヘラ整形			や茶良	や粗褐	い色好	整形業	5 :
" 4	"	土師	高坏、	坏部		ヘラ整形		横ナデ			や暗良	や粗	い色好	反転	
第 10 5 図	"	土節	童		24.8	黒褐色					褐良		色好	反転	
第 12 1 図	S B - 6	土師	整		17.0						や褐良	や 粗	い色好	反転	
" 2	"	土師	鬼高		16.2 5.2 -						茶良	密褐	色好	丹塗	
" 3	"	土師	鬼高		17.6 3.7 —						灰良	密褐	色好		
" 4	"	土師	鬼高		13.2 3.7 —			ヘラ整形			褐良	密	色好		
第 14 1 図	S B - 10	土師	坏		13.8						褐良	密	色好	反転	'
" 2	"	土師	整		20.0						褐良	密	色好	砂粒反転	含む
" 3	"	土師	坏		12.8			ナデ			灰良	密褐	色好		

<u> </u>												
挿図	出土地点	種類	器形	法(口径)	Ā	問		整	胎	±		
番号			111 /12	量、底径)	外	面	内 面	底	色 焼	調成	備	考
第 16 1 図	S B 11附足	ć 土師	甕	- (推)28.0 9.4				木葉痕	褐良	色好	1	
" 2	"	土師	甕	7.0					褐良	—— 色 好	ł	
// 3	"	土師	鬼高	12.0 4.2 —					茶複良		丹途	
" 4	"	須恵	台付坏	15.6 4.3 11.4					緻 青 灰 良	密	反転	
第 19 1 図	1 号配石	土師	壅	20.6					粗褐良	 い 色 好	反転	
" 2	"	土師	坏	11.0 3.1 5.5				糸切り	福良		-	
第 20 1 図	2 号配石	土師	甕底部	10.0	細かいハケ目		-	木葉痕	砂粒を暗視良		 	
" 2	"	土師	小鉢	6.0 4.6 3.5	指頭押え		ハケ目		赤褐		手捏土	器
// 3	"	土師	坏	(推)8.5 3.3 (推)4.0	ヘラ磨き				一級 落 褐ろ	密色い		\exists
" 4	"	土師	高坏台部		ヘラ磨き				緻褐良	密色好		-
第 22 2 図	土壙 1	土師	高坏	9.0					密暗良		反転	-
" 1	土壙 3	土師	甑	19.0 19.0 8.4					密視良	色 好	反転	
第 26 1 図	鍛冶遺構	土師	甕	18.6	ヘラ削り		ヘラ削り		やや相視良		反転	
第 29 1 図	5 G	粘板岩	自然石								長さ33. 巾12.2 厚さ3.0	- 1
第 28 1 図	2 号集石列 付近	土師	坏蓋	18.0 _ _			一部円文不鮮明	3	密	色好	表と内側	-4
" 2	"	土師	浅鉢	20.0	赤色塗彩横ナデ	1	ハケ整形の上を 廣ナデ	:	阁	色		1
" 3	"	土師	小形甕	7.4	ハケ目整形		ハケ目整形		やや相茶褐良	・色好		7
" 4	"	灰釉	底部	5.8	灰釉				密灰白良	色好		7
第 32 1 図	S B – 1	土師	鉢	33.0					密	色好	反転	7
" 2	"	土師	塑						密略良	\dashv	反転	1
<i>"</i> 3	"	土師	鉢	13.4 5.8 6.0					密略	\rightarrow	反転	1
第 34 1 図	S B – 2	土師	甑	9.4 13.7 7.0					や や 粗 褐 良		反転	1

挿図	th T HP 누	66 10	REA.	ши	法/口径\	調		整		J.		±.		
番号	出土地点	種類	器	形	量(器高)	外	面	内 面	底	9 9		調成	備	考
" 2	"	土師	手捏		3.6 3.6 3.8	口緑部回転水引			木葉痕	褐良	密	色好		
<i>"</i> 3	"	土師	甕		7.6					暗良	密褐	色好	反転	
第 36 1 図	S B — 9	土師	夔		- 10.8				木葉痕	褐良	密	色好	反転	
″ 2	"	土師	坏		17.0 2.6 —					褐良	密	色好		
第 38 1 図	S B - 4	土師	坏		17.0	ロクロ水引		ロクロ水引へラ 削り		緻暗良	褐	密色好		
" 2	"	土師	坏		推(11.0) 2.2 6.2	ロクロ水引		ロクロ水引		茶良	密褐	色好		
" 3	"	土師	坏		10.0 3.2 5.2	ロクロ水引		ロクロ水引	糸切り	密褐良		色好		
第 40 1 図	S B - 5	土師	甕		30.8 - -					や褐良	や粗	・色好	反転	
" 2	"	土師	甕		- 5.2				陰刻あり	粗褐良		・色好	小石、 粒 を含む	砂 s
<i>"</i> 3	"	土師	羽釜		26.6 - -					や褐良	や粗	い色好	反転	
" 4	"	土師	塑		- 7.8					や暗良	や粗	い色好	反転	
<i>"</i> 5	"	土師	置カマ	٢						や褐良	や粗	い色好	反転	
<i>"</i> 6	"	土師	築		- 12.2					密褐良		色好		
"7	"	土師	坏		10.8 - -					緻褐良		密色好	_	
<i>"</i> 8	"	灰釉	埦		(推)15.4 — —	ロクロ水引				緻灰良		密色好		
<i>"</i> 9	"	灰釉	埦		(推)16.0 — —	ロクロ水引				級灰良		密色好		
<i>"</i> 10	"	灰釉	坏		11.4 2.8 6.4					白灰良		色好		
<i>"</i> 11	"	須恵	坏の蓋		14.0 _ _					密灰良		色好		
第 42 1 図	S B - 7 カマド	土師	坏		12.6 3.2 4.4					褐良	密	色好	反転	
" 2	"	土師	坏		14.0 - -					良	褐	色好	反転	
" 3	"	土師	塾		28.0 - -	タテハケ目		ヨコハケ目		茶良		色好		
" 4	"	土師	整		27.4 - -	タテハケ目		ヨコハケ目		砂粒暗良	を含	む色好		

挿図				 ,	法/口径\		調			胎土	Atttr.
番号	出土地点	種類	器	形	量(器高)量	外	面	内 面	底	色 調 焼 成	備考
第 43 1 図	SB-7上層	土師	坏		17.4 - -					緻 格 色 赤 褐 色 好	反転
" 2	"	土師	III.		17.0 2.8 —					や 粗 い 黄 褐 色 良 好	反転
<i>"</i> 3	"	土師	ш		13.8 2.9 —					密	一部反転
" 4	"	土師	坏		12.6 4.0 5.6					緻密 赤褐色 良好	
<i>"</i> 5	"	土師	坏		14.0 _ _					緻 密 赤 褐 色 貞	反転
<i>"</i> 6	"	土師	坏		12.9 3.0 4.6					密赤褐色	
"7	"	土師	坏		13.0 4.1 4.0					密赤褐色	反転
" 8	"	土師	坏		14.0 4.5 6.0					や を 粗 し 赤 褐 色 良 好	反転
<i>"</i> 9	"	土師	瓾		26.0 - -	斜めハケ目	1	タテハケ目		砂粒を含む 暗 褐 色	
第 44 1 図	SB-7 下層	土師	坏		11.8 - -					緻 密 褐 良	反転
" 2	"	土師	坏		14.4 3.3 —					緻 密 赤 褐 色 良 好	反転
" 3	"	土師	m		12.0 2.7 3.7					緻 密 赤 褐 色 貞	反転
" 4	"	土師	坏	-	14.0 4.1 4.0					密赤褐色	反転
<i>"</i> 5	"	土師	坏		15.0 - -					密褐良如	反転
<i>"</i> 6	"	土師	坏		12.0 5.3 5.2					緻 密码 色质	反転 内黒
"7	"	土師	魏		34.0	タテハケ		ヨコハケ目		砂粒を含む 褐 良	.
<i>"</i> 8	"	土師	塑		35.0 — —	タテハケ[1	ヨコハケ目		砂粒を含む 赤 褐 色 良 好	
第 46 1 図	S B 8	土師	坏		9.6 3.0 —	ロクロ斜き	北線	回転ナデ		密褐良好	4
" 2	"	土師	坏		11.0 3.0 5.8					やや粗い赤 褐 色	
<i>"</i> 3	"	緑釉	台付与	不	14.8 6.0 7.2					級 密 線 色 良 好	. 淡灰色 - 軟質
第 51 2 図	5 号列石	土師	円筒		- 11.5			ヘラ調整	木葉痕	や や 粗 し茶 褐 色	
" 3	"	土師	坏		9.4 2.1 4.6			密良好褐色	回転 糸切り	密褐色	<u> </u>

挿図	ШІмья	CE W	- T/	法/口径\		調	整		H		±		_
番号	出土地点	種類	】 器 形	(器高) 量(底径)	外	面	内 面	底	焦		胡成	備	考
" 4	"	土師	整	— 在 (7.0)			ヘラ調整	木葉痕	砂暗良	粒 含 褐	む色好		
" 5	6 号列石	土師	坏	10.0 2.9 4.6				回転 糸切り	褐良	密	色好	反転	
<i>"</i> 8	"	土師	坏	14.0					粗褐良		い色好	反転	
<i>"</i> 6	〃 集石	土師	坏	(推)11.0 (推)4.0 (推)3.0	ロクロ水引		ヘラ磨き		緻黒良	褐	密色好		
14	"	土師	甕	(推)17.0 - -	ヨコナデ		タテヘラ削り		や褐良	や粗	い色好		
" 1	10G	土師	甕	25.0 - -	ヘラ削り				や褐良	や粗	・色好	反転	
" 7	"	土師	坏	8.0 2.7 4.6			ロクロ水引	糸切り	級茶良	褐	密色好		
<i>"</i> 9	"	土師	坏	推(13.0) - -	ヘラ削り				緻黒良	褐	密色好		
<i>"</i> 10	"	土師	香炉	9.6 4.3 6.0	ロクロ水引		ロクロ水引	糸切り	緻褐良		密色好	3 脚	
<i>"</i> 11	"	土師	坏	12.0	ヘラ削り		ロクロ水引		緻暗良	褐	密色好		
<i>"</i> 12	"	土師	坏	(推)10.6		-	ロクロ水引		褐良	密	色好		
<i>"</i> 13	"	土師	耳栓 (縄文)	6.0 1.9 —					極赤良	褐	密色好	胎土は 化粧粘	黒土
第 52 6 図	7号列石	土師	坏	10.4					緻黒良	褐	密色好	反転	
"7	"	土師	坏	- 6.4				糸切り	褐良	密	色好	「大」 刻印	の
" 1	∥ 3 G	土師	Ш	9.7 - 5.3				糸切り	褐良	密	色好		
"2	"	土師	高台坏	15.0 6.0 4.8					緻暗良	褐	密色好	反転	
<i>"</i> 3	"	土師	坏	12.0 3.1 -					緻赤良	褐	密色好	反転	
" 4	"	土師	坏		回転ナデ		黒色	糸切り 黒色	暗良	密褐	色好		
<i>"</i> 5	"	須恵器	坏	13.0 3.8 —					青良	密灰	色好	反転	
第 54 1 図	1号溝の下	土師	坏	12.8 _ _					褐良	密	色好	反転	
" 2	"	土師	坏	11.2 4.8 3.7				回転 糸切り	や褐良	9 粗	い色好		
<i>"</i> 3	"	土師	坏	_ _ 4.7				回転 糸切り	 褐 良	密	色好		

挿図				法/口径\	i	调		整		胎		±.		
図番号	出土地点	種類	器形	量 器高)	外	面	内	面	底	色焼		調 式	備	考
第 55 1 図	水溜付近	石臼	(上臼)	直径(推)27 高9.5	溝の巾(外側) 山の巾(外側)	5 mm~ 8 mm 6 mm~21mm	溝の深さ	1 mm					穀臼	
第 66 3 図	6 号集石	土師	坏	- 4.4	ロクロ水引、	沈線あり			糸切り痕	赤良	密褐	色好		
" 4	"	土師	鬼高	16.0 _ _	磨きあり		磨きあり			濃良	密茶	色好		
<i>"</i> 5	"	土師	鬼高	15.0 - -			内面磨き	あり		黄良	密土	色好	黒塗	あり
"7	"	土師	埦	14.9 _ _						外	黒	色		
" 1	墓地内	土師	坏	12.6 4.0 4.8					糸切り痕	茶良	密	色	底部	黒色
″ 2	"	土師	築	7.6						褐良	密	色好		
<i>"</i> 6	4 G	土師	土弾	直径4.1 ~3.6						褐良	密	色 好		
<i>"</i> 8	"	灰釉	III.	14.4 2.4 —						緻灰良		密色好		
<i>"</i> 9	"	灰釉	ш.	13.6 2.5 7.0						緻灰良		密色		
<i>"</i> 10	"	土師	III.	8.4 1.9 5.4					糸切り痕	う良	密す者	色		
<i>"</i> 11	"	須恵	長形壺	16.0 _ _						緻黒良	灰	密色		İ
<i>"</i> 12	"	土師	鬼高	10.6 3.6 —			内面磨き	あり		黒良	密	色好	指痕	あり
<i>"</i> 13	"	須恵	坏	13.0 3.8 —						灰		色		
<i>"</i> 14	"	緑釉	台付坏	17.3 7.9 6.9	緑釉		陰刻			緑良	密	色好	胎 濃 硬 質	は 色
<i>"</i> 15	"	上師	埦	12.6 - -					黒色	茶良	密	色好		
<i>"</i> 16	"	須恵	埦	12.8 4.5 —						灰		色		
<i>"</i> 17	"	須恵	坏	13.0 3.8 —						灰	色			
第 59 1 図	7.8号集石	土師	羽釜把手部	(推)31.0 — —	縦ハケ目		横ハケ目			暗良	密褐	色好		
" 2	"	土師	坏	8.8 - -						緻赤良	褐	密色好		
# 3	"	土師	坏	- (推)5.6						褐良	密	色好	反転	
<i>"</i> 4	"	土師	台付碗	13.0 (推)7.9						緻褐良		密色好	砂粒 む	を含

挿				1				T			
図番号	出土地点	種類	器形	法(口径 器高) 量(底径)	調 	内 面	底	胎色焼	土調 1	備	考
<i>"</i> 5	"	土師	坏	12.7		11 111	list,	福	成		_
<i>"</i> 6	"	須恵	台付碗	(推)8.6				段級灰	· 任好	-	
" 7	"	土師	台付坏	=				良赤褐	好	+	
" 8	"	土師	坏	13.8	外面底部	調成粗雑	糸切り	良密	好	†	
<i>"</i> 9	"	土師	台付碗	5.4				褐良 緻灰 白	色好一密色好		
<i>"</i> 10	"	土師	坏	9.4	内面底部	ロクロによる辺 線多量	糸切り	良密		1	
" 11	"	土師	m.	5.2 12.2 3.2	ロクロによる沈線が目立つ	W > E	糸切り	褐良密	色 好 ———		
<i>"</i> 12	"	土師	坏	5.0 14.0 4.2				祖褐	色好しい角	反転	
<i>"</i> 13	"	土師	坏	6.1 10.8 3.3				良ややり	色好しい色	反転	
第 60 1	11号集石	土師	塑	8.2 25.4 -				褐良やお褐	色好しい色		
Ø	"	土師	壺	14.8				良密	好		
<i>"</i> 3	"	土師	羽釜	28.8 - -				暗良 粗暗 褐	色好しい角		
" 4	"	土師	鉢	32.4				良密	色好		
第 61 1 図	2号カマド	土師	器台	8.4 4.2 4.5		ロクロ水引	糸切り	暗良砂赤良	色好 む色好		
" 2	"	土師	置カマド	28.6				密視良	色好	反転	
第 62 1 図	3号カマド	土師	坏	11.6 3.8 6.0				やや粗赤褐良			
" 2	"	土師	坏	11.7 3.7 4.3				密視	色好	一部反	転
" 3	"	土師	坏	15.6 5.0 4.0				密	色好	一部反	転
" 4	"	灰釉	台付皿	7.6 2.5 7.0				級 灰良	密色好		
" 5	"	灰釉	台付皿	10.2 - 4.9	ロクロによる形成			密灰良	色好		
" 6	"	須恵	甕	14.8				緻 青 灰 良	密色好	反転	
<i>"</i> 7	"	土師	Æ		横ナデ	全体に作りが粗 雑		砂粒を含 暗 褐 良			

挿図				法/口径\	調	整		胎		ı	/#. ¥
番号	出土地点	種類	器形	量(器高)	外 面	内 面	底	色焼	調成	١.	備 考
″ 8	"	緑釉	坏	(推)10.0 - -	緑釉			緑良	密	色好	胎土は 濃灰色 硬質
第 78 1 図	鉄製品	鉄斧		長さ7.8 巾2.9							14G
" 2	"	火打金		長さ6.7 巾(推)1.7							11 G
" 3	"	鎌		長さ13.2 巾2.3							14G
" 4	"	鉄鏃		長さ7.9 巾0.5							14G
<i>"</i> 5	"	(釘)		長さ9.3 巾0.6							7 G
<i>"</i> 6	"	(釘)		長さ5.4 巾0.4							2 G
第 77 1 図	銭貨	銭貨	永楽通寶								11 G
" 2	"	銭貨	寛永通寶								6 G
" 3	"	銭貨	開元通寶								14G
" 4	"	銭貨	政和通寶								6 G
<i>"</i> 5	"	銭貨	天慶元寶								6 G
第 64 1 図	2 G	土師	台付坏	8.3 3.4 5.0			糸切り	褐良	密	色好	
" 2	"	土師	台付坏	- - 5.4			糸切り	褐良	密	色好	
" 3	"	土師	甕	- 17.6	ハケ目(再度粘土を貼付)			黄良	密 茶 褐	色好	
第 65 1 図	5 G	土師	坏	14.0 3.7 (外径)14.0		横ナデ		や茶良	や褐	密色	
" 2	"	土師	坏	14.6 4.5 (外径)14.6	赤色塗彩	赤色塗彩		赤良	密色 塗	彩好	
" 3	"	土師	甕	- 5.0				や茶良	や粗	・色	
" 4	"	土師	甕	— — 約6.0		ヘラ整形		粗茶良	褐	色	
<i>"</i> 5	"	土師	高台付坏	7.0	みがきの土に暗文有り	糸切りの土へラ 整形		茶良	密褐	色	
<i>"</i> 6	"	土師	高坏	13.0 8.5		ナデあり		や茶良	や 褐	密色好	
"7	"	土師	坏	14.0 3.7 外径14.0		横ナデ		や茶良	や褐	密色好	

挿図	出工物 左	86 VG	BB BB	11/4	法/口径\		調	#		B		±		
番号	出土地点	種類	器	形	量、器高)	外	面	内 面	底	貨	_	湖成	備	考
" 8	"	土師	坏		16.0 3.2 14.6	ヘラけずり				暗良	密褐			
<i>"</i> 9	"	土師	坏		7.6	暗文ありへ	ラみがき		糸切りの上 ヘラ整形	茶良	密褐	色好		
<i>"</i> 10	"	土師	高台作	寸坏	6.6			内黒	糸切り	や茶良	や粗	い色好		
″ 11	"	土師	甕		32.0 	ハケ整形		内面ハケ整形		や茶良	や粗			
″ 12	"	須恵	甕		21.0 _ _					緻灰良		密色好		
<i>"</i> 13	"	須恵	底部		- 9.6					灰良	密	色好		
<i>"</i> 14	"	灰釉	蓋		24.0									
<i>"</i> 15	"	須恵	坏		10.0 3.1 外径10.0					青良	灰	色好	,	
第 67 1 図	6 G	土師	坏		11.5 2.8 5.8	ロクロ水引		ロクロ水引	糸切り	緻褐良		密色好	上層	
" 2	"	土師	羽釜		(推)21.8 - -					暗良	密褐	色好	上層反転	
" 3	"	土師	坏		12.0 2.8 6.2	ロクロ水引		ロクロ水引	糸切り	緻白良	褐	密色好	上層	
" 4	"	土師	坏		12.0 3.1 6.2	ロクロ水引		ロクロ水引		緻白良	褐	密色好	上層	
# 5	"	土師	坏		(推)12.0 4.4 5.0	ロクロ水引		ロクロ水引		緻茶良	褐	密色好	上層	
<i>"</i> 6	"	緑釉	坏			ロクロ沈線		文様有り		級 緑 良		密色好	上層	
"7	"	須恵	塑		(推)19.0	回転ナデ、	ハケ目文様	回転ナデ、釉を施す		灰良	密	色好	上層	
" 8	"	土師	甓		(推)18.0	タテハケ目		ヨコハケ目		砂粒暗良	を含褐	む色好	下層	
<i>"</i> 9	"	土師	坏		10.6 2.6 5.8	ロクロ水引				砂粒 褐 良	を含	む色好	下層	
<i>"</i> 10	"		坏		12.0 3.7 4.0	ロクロ水引		ロクロ水引		緻 暗 良	褐	密色好	下層	
<i>"</i> 11	"	土師	坏		11.2 4.5 3.5					緻褐良		密色好	下層	
<i>"</i> 12	"	土師	坏		(推)13.0	ヘラ磨き		ヘラ磨き		級 赤良	褐	密色好	下層	
<i>"</i> 13	"		坏			ロクロ水引		ロクロ水引	糸切り	緻褐良		密色好	下層	
″ 14	"	土師	坏		13.0 2.8 6.4				糸切り	緻褐良		密色好	下層	

挿図				法(口径、器高)	調	整		胎土色調	備	考
番号	出土地点	種類	器形	量低径	外 面	内 面	底	焼成	VHI	
<i>n</i> 15	"	土師	高坏の坏部	6.4	ロクロ水引	ロクロ水引		緻 褐 色 良	下	3
第 6816 図	"	須恵	塑	(推)15.0	灰釉を施釉	回転ナデ		級 说 (d)	图 下	2
<i>"</i> 17	"	須恵	蓋			回転ナデ		級 统	下 下 子	
<i>"</i> 18	"	灰釉	台付坏	(推)8.0	ロクロ水引			緻灰良	下 下	图
<i>"</i> 19	"	土師	羽釜	(推)24.6				砂粒を含む 暗 褐 (良	下五	图
" 20	"	土師	甕	(推)29.0				砂粒を含 暗 良	下	習
第 69 1 図	7 G	土師	鉢	13.8				緻 黒 褐 良	密 五子	
" 2	"	土師	坏	12.0 4.5 5.0				密視良	五	
" 3	"	土師	ш	11.5 3.0 5.0				密 赤 褐 良	反	転
" 4	"	土師	羽釜	22.4				やや 級 暗 褐 良	密色好	
<i>"</i> 5	"	須恵	変	10.0				緻 青 灰	密 色好	
<i>"</i> 6	"	須恵	鉢	(推)15.0				密灰良	色好	
"7	"	須恵	횊					緻 青 灰 良	密反	転
第 70 1 図	8 G	土師	坏	14.4 5.2				小石混 赤褐 良	り色好	
" 2	"	須恵	蓋					緻灰良	密色好	
<i>"</i> 3	"	土師	坏	15.8 4.4 8.0				良	色好	
" 4	"	須恵	蓋	8.2 3.2				良良	密色好	
<i>"</i> 5	"	土師	築	6.8				小石混 表良	入 色 好	
第 71 1 図	9 G	土師	墾	27.0					色好	
" 2	"	土師	坏	13.0 4.2 5.0	:				色 好	転
// 3	"	土師	ш	(推)12.4						.転
" 4	"	土飾	甕	6.8	3			小石混赤褐良	入 色 好	

			r	-						_	
挿図	出土地点	種類	器形	法(口径 器高) 底径	調		整			出問	備考
番号					外	面	内 面	底	焼成		<i>y</i> 3
<i>"</i> 5	"	土師	坏	13.8 6.5 8.0					やや粗暗 褐良	い色好	反転
" 6	"	土師	塑	7.5	タテハケ目		ヨコハケ目	木葉痕	密暗褐良	色好	,
"7	"	土師	甕	7.6					密略良	色好	砂粒あり
" 8	"	土師	壷	19.0					やや粗褐良	い色好	反転
<i>"</i> 9	"	土師	小皿	(推)8.0 一 (推)5.0				糸切り	緻褐良	密色好	
第 72 1 図	11 G	土師	内耳	29.3					密褐良	色好	反転
" 2	"	須恵	蓋						緻 灰 白	密色好	
" 3	"		土製円盤	長さ4.2 厚み1.2							擂鉢
" 4	"		内耳	29.0 16.0 24.6					密暗良	色好	反転
" 5	"		土製円盤	長さ4.2 厚み0.8		_					須恵質
<i>"</i> 6	"	土師	坏	10.0 2.3 4.7			ロクロ水引	糸切り	緻 赤 褐 良	密色好	
" 7	"	土師	変	10.6				やや粗い 暗褐色 良好	反	転	
" 8	"	土師	甕	20.0			赤色塗彩		緻 赤 良	密色好	反転
第 73 1 図	12G	土師	坏	7.2				回転 糸切り	級褐良	密色好	
" 2	"	土師	坏	7.2 - 4.1				回転 糸切り	密 褐 良	色好	反転
" 3	"	土師	坏	15.3 5.6 5.6				回転 糸切り	密暗 褐良	色好	反転
" 4	"	土師	坏	17.6					緻褐良	密色好	反転
<i>"</i> 5	"	土師	坏	10.8 4.3 —					密視良	色好	反転
<i>"</i> 6	"	土師	坏	17.0 5.1 —					褐良	色好	反転
"7	"	須恵	蓋	16.4 3.2					緻 青 灰	好	
<i>"</i> 8	"	須恵	坏	6.0					緻 青 灰良	密色好	
<i>"</i> 9	"	土師	塾	14.2			ヘラ調整		や や # 暗 褐 良	単い色好	一部反転

挿図番号	出土地点	種類	器形	法(口径) 器高(底径)	調		整			±		
					外 面	内 面	底	倒		調成	備	考
<i>"</i> 10	"	土師	台付埦	7.3	褐色	黒色		良	密	好	内黒	
″ 11	"	土師	台付埦	7.3	褐色	黒色		良	密	好	内黒	
第 74 1 図	12.13G	土師	羽口					粗褐良		・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		
" 2	"	土師	鬼高坏	12.6 4.1 3.9				暗良	密褐	色好		
# 3	"	土師	坏	10.7 2.4 5.6			回転糸切り	褐良	密	色好	反転	
第 75 1 図	13G	土師	ш	19.2		暗文あり		褐良	密	色好	反転	
" 2	"	土師	手捏	3.6 2.7				や黄良	や粗	しい色好	反転	
# 3	"		土製円盤	長さ3.8 厚み1.1								
" 4		土師	坏	11.6		-		緻暗良	褐	密色好		
<i>"</i> 5	"	土師	坏	10.8 3.3 5.5			回転 糸切り	褐良	密	色好		
" 6	"	土師	高台付坏	- 6.4				緻褐良		密色好	反転	
<i>"</i> 7	"	土師	坏	11.4 3.3 5.4			回転 糸切り	褐良	密	色好		
<i>"</i> 8	"	須恵	蓋					緻青良	灰	密色好	反転	•
" 9	"	土節	坏	8.3 2.7 4.2			糸切り	褐良	密	色好		
<i>"</i> 10	"	土師	塾.	22.6 - -				褐良	密	色好	反転	
第 76 1 図	14.15G	土師	坏	16.0 4.0				や赤良	褐褐	い色好	反転	
" 2	"	土師	坏	14.0				緻良		密好	反転	
" 3	"	土師	鬼高	10.8 3.2			茶褐色		密褐	色好	小石、 石粒 含む	赤
" 4	"	緑釉	高台付坏	(推)		ロクロ		 緑 良	密		胎土は 濃灰色 硬質	:
<i>"</i> 5	"	土師	土製円盤	長さ3.1 厚み0.9		-						\dashv
<i>"</i> 6	"	石器	火で鉢	(推口径) 20.0					_			
										1		

۱ ۱

第5章 下長崎遺跡と地域の歴史

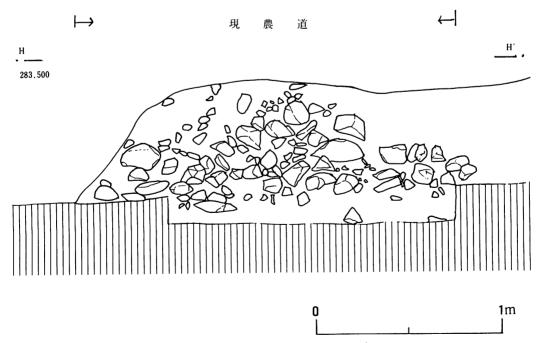
第1節 条里型地割との関係

班田収授法によって施行された条里制は、甲府盆地にも実施され、その遺構としての道路による方格地割(坪)や、坪内には長地型と半折型の水田址が残されているといわれてきた。しかし近年条里制の研究が進み、その内容や時期などについて明らかにされつつあり、その遺構を概括的に「条里制遺構」と呼ぶのに疑問が生じてきたので、ここでは「条里型地割」とした。この項では道による地割が施行された時期について検討する。

甲府盆地には断片的に多くの条里型地割が広がる。その一つである浅川・境川扇状地におけるこの地割は典型的であるといわれている。下長崎遺跡はこの上(東)部末端地域にあり、坪割の道は正しく一町方格に敷かれてはいないが、その形態を残している。発掘地域内を巾約4mのこの道路が一本横切っていて、わづかに延長4mだけであったが、発掘することができた。

道の直下から平安時代後期、12世紀前半と思われる石組・水溜が、また周囲からはこれに伴う同時期の住居址群が検出されたことは、道路が集落が移動した後に敷設されたものであることを物語るであろう。これは石橋条里制遺構第3地点より約1世紀遅い時期であるので、扇状地では条里型土地割が扇状地扇端から行われたことを意味し、場合によっては集落を移動させて、条里型地割を施行し、耕地化したことも考えられる。

(註1) 『石橋条里制遺構 蔵福遺跡 侭ノ下遺跡』 山梨県教育委員会 1984



第79図 道路セクション図 (川 G 北壁)(1/20)

第2節 八代郷と長江郷について

下長崎遺跡は分布調査の結果、濃密に遺物が散布している範囲はほぼ東西150m、南北150mで、発掘地はその南端あたりに位置することは前述した。この発掘地は北側を東西に走る町道51号線に1部が接している。そこで条里型地割の道であると考えられる51号線と下長崎遺跡との関係を、さらには51号線が八代郷と長江郷との境界の一部であった可能性のある理由をいくつか取り上げてみたい。

和名抄に記載されている長江郷は八代郷の南にあるとの説があり、現在の八代町永井はその遺名、八代郷は南八代村、北八代村となって残ったといわれていて(甲斐国志)、現在もその位置関係になっている。

長江郷には現在の八代前永井区、米倉区、岡区が入ると考えられているが、さらに増田区増利 も入ると思われる。

町道51号線は江戸時代中期には既に、今の南区と岡区、その下の南区と永井区との境になっていてさらにその下では川(界川)を境に増利と大間田が分かれ、畑の耕作者もほぼこれで分かれていたので、中世紀末にもこの形態になっていたことがうかがえる(八代町誌)。中世の武田氏の支配下でも江戸時代と大差はないであろう。

小字地名も道を挟んで両側では、著しい差がみられる。条里型地割の地名は坪付名に由来するものがあると考えられ、また永井区地内には中世以前に付されたと考えられるような信仰関係の地名が約18ヶ所あると言われている。これらの地名は52号線の南側(永井区・増田区増利)ではほぼ1坪毎にあるのに対し、北側の南区ではほぼ4坪を1単位として付けられている。また道の北側と南側には同じ小字名が10あり、その小字名は穴田(あなだ)、宮田(みやた)、泉田(いずみだ)、柳田(やなぎだ)、池田(いけだ)、横田(よこた)、長崎(ながさぎ)、神田(じんでん)、儘ノ上(ままのうえ)、一丁田(いっちょうだ)である。この1坪毎に付けられた小字名はさらに南の境川村石橋条里遺構に続く。南側で重複しているものは角田(すみだ)、山形(やまがた、山家田)だけの2ヶ所だけである(第80図)。両者の重複は異状に多いといわざるを得ない。これは両者がそれぞれ統治系統が異なることを意味しないであろうか。

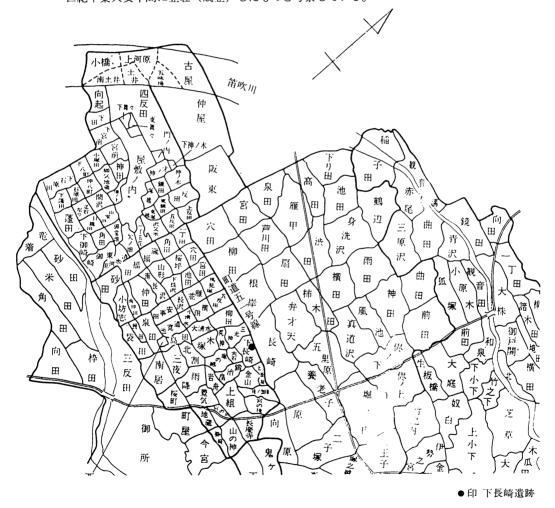
51号線に南と北から直交する条里型地割の道路は、小字五反田から小字下長崎までの間では、四叉路が5ヶ所、三叉路が9ヶ所である。本来条里型地割は交点が直交する四叉路である可きであるが、この51号線では周囲に比較して四叉路が少なく、51号線で止まる道(三叉路)が多い。四叉路が下(西)方に多いのは条里型地割が下方からなされたため、すなはち下方から開墾されてきたためであろうか。上方では51号線の南と北では別べつに敷設されたために交点が交わらなかったのではないであろうか。したがって51号線は条里型地割を施行する当初にまず計画道路として、西から東(上)方に向かって1本長く敷設されたものと思われる。

以上は明治25年に作成された分間図と現地を調査検討したものである。

下長崎遺跡とこの51号線が敷設された時期の重複(前後)関係は、51号線が今回の発掘域外であったので、前述のように推定の域を出ない。

町道51号線を挟んで南と北では地形が同様であるにもかかわらず、以上のように相違があり、 それが条里制に基くものであるか、荘園成立後になってからのものであるかは祥かにできなかったが、少なくともその相違は平安時代後期までは溯ることができるであろう。

- (註1) 『山梨県の歴史』磯貝正義 飯田文弥 1973
- (註2) 「甲斐の郡(評)郷制」 坂本美夫 『研究紀要』1 1983 山梨県立考古博物館 埋蔵文 化センター
- (註3) (註2)に同じ
- (註4) 「地名考」 中村良一 『広報やつしろ』7月号 1988
- (註 5) 「八代荘の成立事情」 秋山敬 『甲府盆地 その歴史と地域性』昭和59年 に八代荘は12 世紀中葉久安年間に立荘(成立)したものと考察している。



第80図 八代町小字図(部分)

第6章 結 び

下長崎遺跡では、古墳時代後期後葉(第 I 期 = 6 世紀第 IV四半期項)より、奈良時代を経て、平安時代後期(第 IV期 = 11世紀第 4 四半期~12世紀第 1 四半期項)までの遺構と遺物が、ほぼ連続的に検出されたので、この地域に集落が約600年間にわたって営まれたと考えてよいであろう。

浅川扇状地の後期古墳時代は初頭の6世紀前半に築造されたと考えられている荘(樹)塚古墳に始まり、これに続く大型石室をもつ地蔵塚古墳が、さらに多くの後期後半の古墳群が築造されるようになる。荘(樹)塚古墳と地蔵塚古墳がこの近くにあるのは、中道町銚子塚古墳築造に始まる甲府盆地の古墳時代初期の強力な政権が北に進み、6世紀前半には、その政治的文化的中心が浅川扇状地扇央に移ったといわれる所以である。後期後葉になると扇頂下部から扇端にかけて古墳群が広がる。

奈良時代、あるいはその前後には、八代郷と長江郷が置かれて国衙の支配下となり、律令政府の支配に組み込まれていく。2つの郷の中心地は旧南・北八代村(現在南区、北区)と旧永井村(現在永井区)にあったものと考えられているので、両者が接する所にあるこの遺跡も、郷の中心域にあったと考えてよいであろう。

平安時代後半、遺跡の分布範囲は浅川扇状地のみならず、山間部にまでおよぶのは、集落が拡散したことを、濃密になったことは人口密度が高くなったことを意味すると考えられる。

一方、平安時代後半に、条里型地割りは前述したように、扇状地扇端から扇央に向って進められたものと考えられる。この遺跡付近でも、遺物の分布状況から推測すると、集落の下方は徐々に上に移り、そこは耕地化していったようである。この遺跡が廃絶したのは平安時代末期の12世紀と考えられ、続いて耕地になったと思われる。

下長崎遺跡には例が少ない石組の遺構が多くあり、緑釉陶器、灰釉陶器、鉄製品などの貴重品も多く出土している。また、この遺跡がある字下長崎に接して金山、鍛冶畠、三光神、荒神の字名があり、少し離れて弁才天などもあるので、この遺跡は当時重要な施設があった集落と考えられる。発掘した範囲は幅が3mと狭かったので、遺跡全体はもちろん、検出した遺構の大きさや性格なども不明な点が多かった。ただこの中のほとんどの石組遺構に破壊された痕跡があったことは注意すべきことであった。

下長崎遺跡付近が何時、荘園領となったかは明らかではないが、以上のような発掘状況によって、以下のような事件との関係が推測できる。

1162年(応保2年)から1163年(長寛元年)にかけて、熊野権現社領八代荘と国衙との間に起った領地をめぐる訴訟事件に対して出された勘文(長寛勘文)がある。この勘文によると、在庁官人三枝守政等に率いられた軍兵は八代荘で、四至の牓示を抜き捨て、荘内の在家を追補したり、神人を搦めとったりして、乱暴狼籍を働いたとある。下長崎遺跡廃絶時の状態はこの事件を彷彿とさせるものがある。この事件の内容については「山梨県の歴史」(磯貝正義 飯田文弥 1975)に詳しいが、その歴史上の意義を、(この事件は)「時代を画する大きな事件といわねばならない。

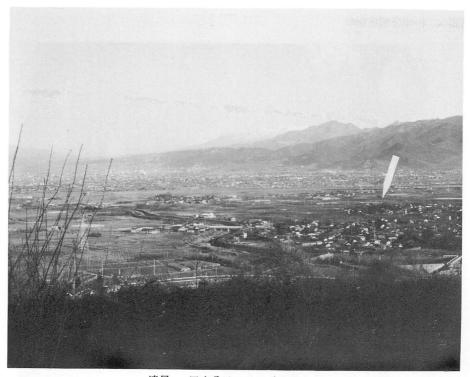
…中略…甲斐の古代豪族三枝氏は、この事件を契機にして没落し、新たに勃興してきた甲斐源氏にその席を譲らなければならなかったのである」としている。これは古代社会から中世社会に移行する節目となる一つの象徴的な事件であった。

下長崎遺跡が時代的、地理的に考えると、この事件と関係あっても不自然ではないと考えられるが、八代郷と長江郷の中心的施設やその後にできた荘園の荘家がどこに置かれたかが、明らかにされないので、ここでは問題点として提起するにとどめたい。

- (註1) 「古墳時代土器の研究」 古墳時代土器研究会 末木健 坂本美夫 1984による
- (註2) 「甲斐国における古代末期の土器様相」 坂本美夫 『神奈川考古』 第21号 1986

図

版



遠景 一甲府盆地・八ケ岳を眺む―



近 景

西より



4 · 3 · 2 · 1 G



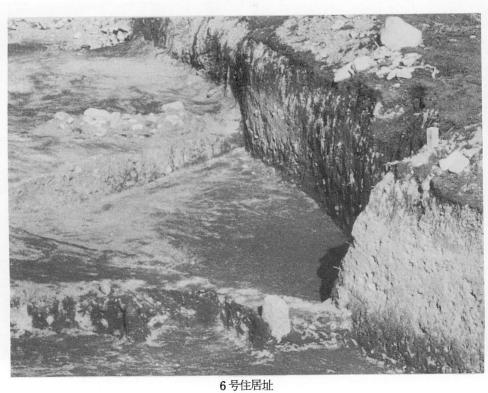
3号住居址

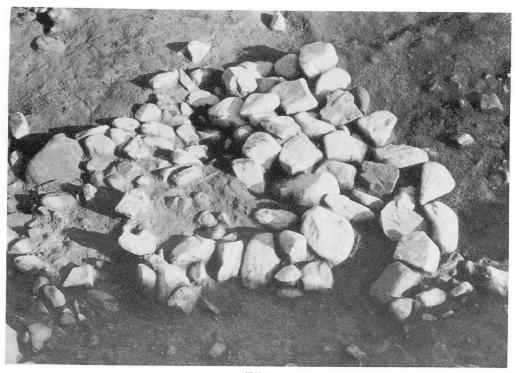


9 · 10号住居址

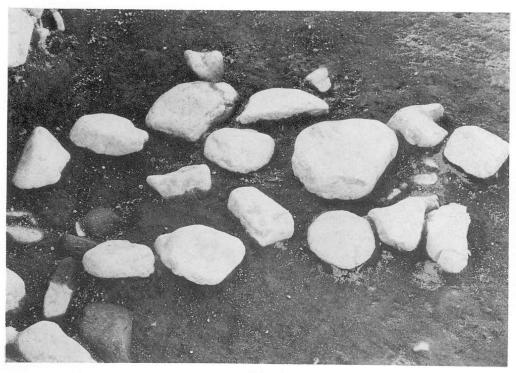


11号掘立柱建物址





1号配石



2号配石



2号土址



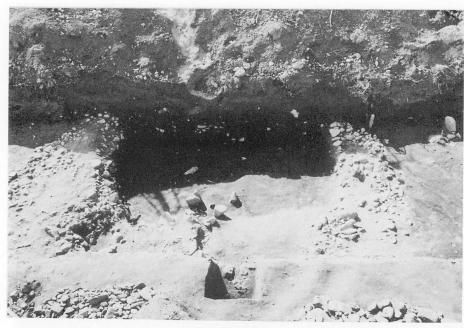
鍛治遺構



2号集石列



粘板岩を囲む配石



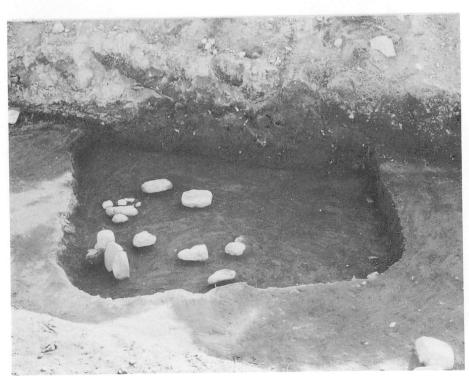
1号住居址



2号住居址



4号住居址



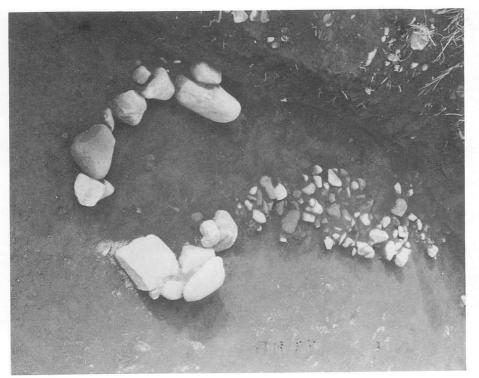
5号住居址



7号住居址



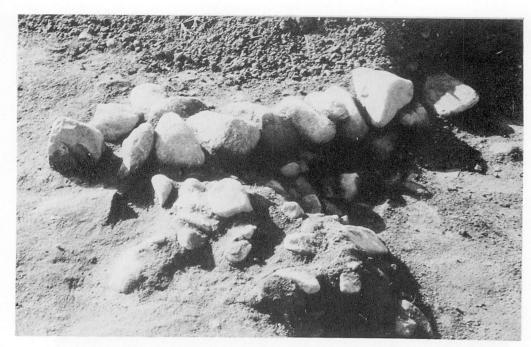
8号住居址



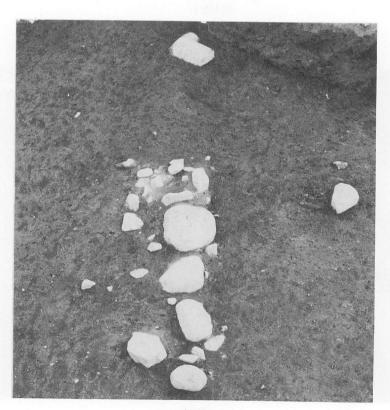
円形配石



1号・2号列石



3号列石



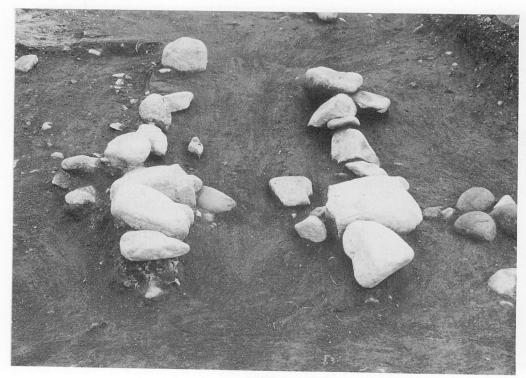
4号列石



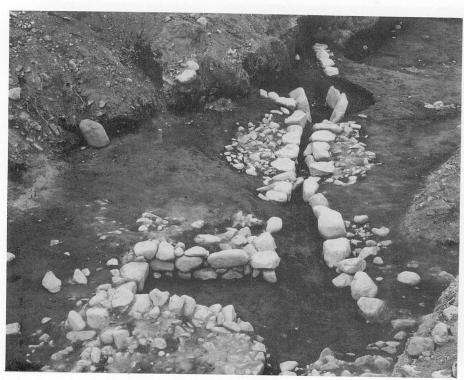
5号・6号列石



7号列石



8号列石



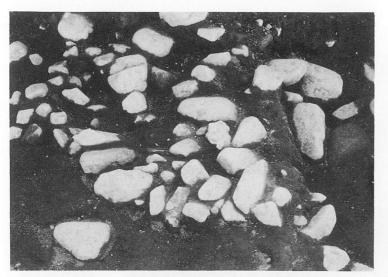
1号溝、水溜



1号溝



水溜め



3号土壙上部



1号溝移築風景



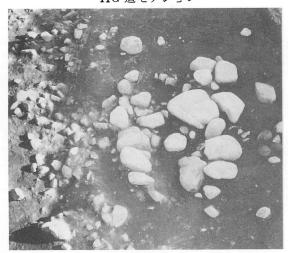
発掘風景



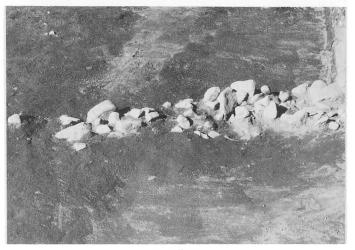
発掘参加者



11G 道セクション



5号集石

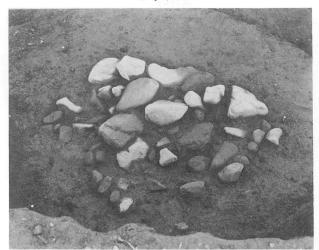


図版 17

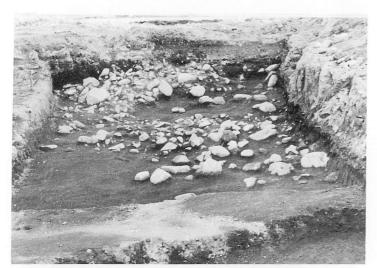
11G道セクション

3・5・7号集石

3号集石



7号集石



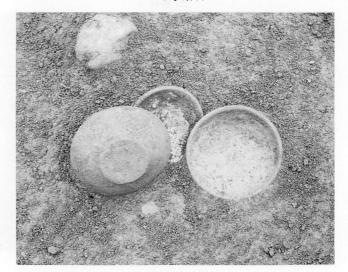
11号集石



1号かまど



12号集石



6 号遺物出土状況

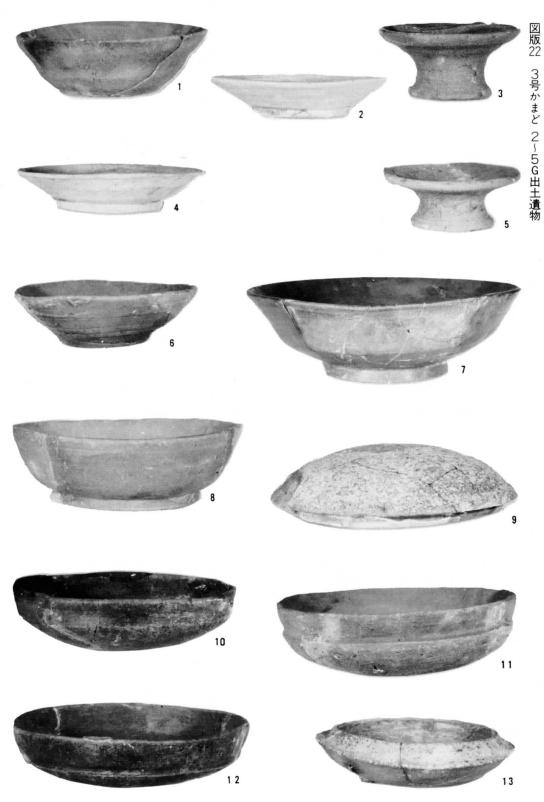


3住(1~4)、6住(5) SB11付近(6)

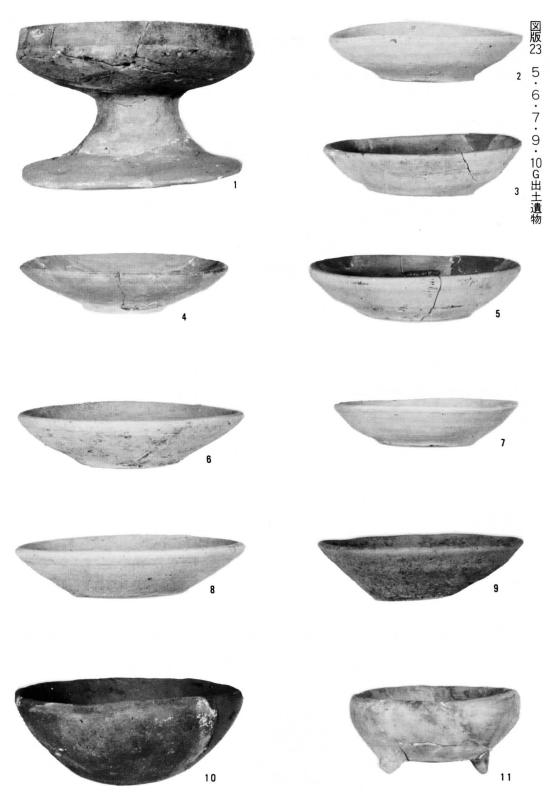


SB11付近(1.2)、 $1\cdot 2$ 号配石(3·4)、 $2\cdot 3$ 号土址(5·6)、2 号集石(7) 粘板岩(8)

2 ・ 7 ・ 8 号住(1~5)、 5 号列石(6)、 7 、 8 集石(7~10)



3号かまど $(1{\sim}4)$ 2G(5) 3G(6) $4G(7{\sim}9)$ $5G(10{\sim}13)$



 $5\,\mathrm{G}\,(1)\ 6\,\mathrm{G}\,(2{\sim}8)\ 7\,\mathrm{G}\,(9)\ 9\,\mathrm{G}\,(10)\ 10\,\mathrm{G}\,(11)$













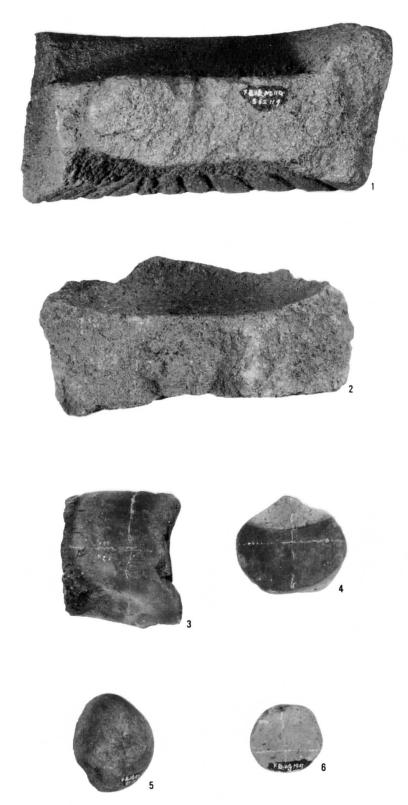




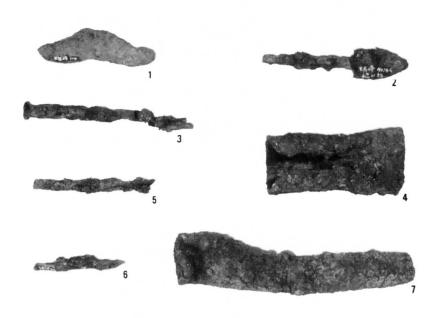




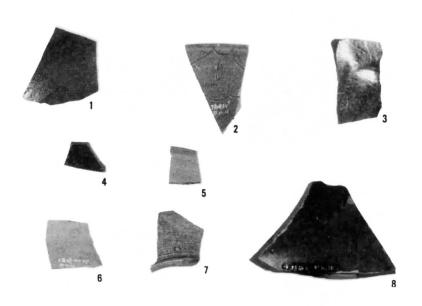
 $11\,\mathrm{G}\,(1)$ $13{\sim}14\,\mathrm{G}\,(2)$ $12\,\mathrm{G}\,(3)$ $13\,\mathrm{G}\,(4.5)$ 銭貨(6 ${\sim}10)$



11G 水溜付近 石臼(1) 火手鉢(2) 羽口(3) 土製円盤(4·5·6)



2G(6) 11G(1) 14G(2·3·4·7)



 $3\,\mathrm{G}\,(3\!\cdot\!5)\ 4\,\mathrm{G}\,(6\!\cdot\!8)\ 6\,\mathrm{G}\,(2\!\cdot\!4)\ 14\,\mathrm{G}\,(1\!\cdot\!7)$

両の木神社遺跡

両の木神社遺跡発掘調査報告書

1.調査に至る経過

昭和62年9月18日 文化庁に発掘通知を提出する。 昭和62年11月4日から11月14日まで調査をする。 昭和62年2月5日石和警察署に遺物の発見通知を提出する。

2. 調査の組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

担当者 主任•文化財主事 小野正文

作業員 八代米子、山下延子、加藤道、米波伊久保、大村和子、降屋末子、伊藤洋子

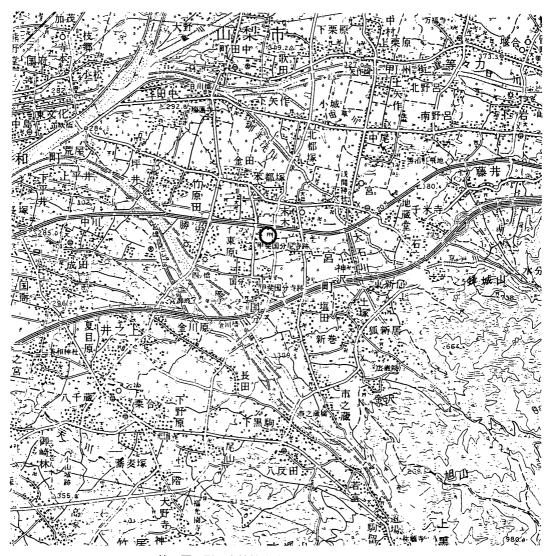
3. 遺跡の位置と歴史的環境

遺跡は山梨県東八代郡一宮町末木子字両の木神社境内に位置する。遺跡より西300mには国分尼寺跡があり、南には国分寺跡がある。また神社前をほぼ南北に走る大型広域農道の建設に伴う調査で平安時代の住居址が5軒検出されている。(『甲斐国国分寺周辺聚落址の調査(予報)』)また、遺跡のすぐ北を走る国道20号線の建設に伴う事前調査で、やはり、平安時代の住居址が検出されている。

『甲斐国志』によれば、両ノ木神社は

両木八幡ト称スー村ノ土神ナリ御朱印社領十四石四斗(慶長黒印帳ニ三斗九升二合ニ作ル其後加増スト見エタリ)社中(東西一町余南北二町余)祭礼角力場(縦二十間横十五間)正殿方六尺葺下リ三尺)拝殿(桁間二間桁行六間九尺)鳥居(桁行一丈)真言宗慈眼寺兼帯スとある。

-1 -



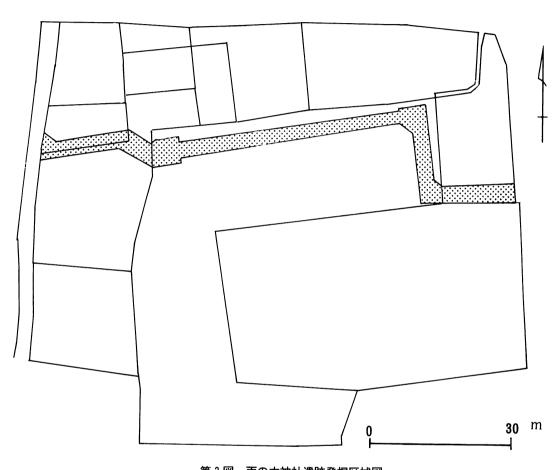
第1図 両の木神社遺跡位置図 (1/50,000)

4. 調査の方法

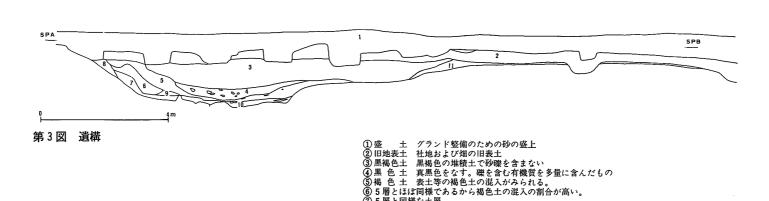
調査は幅2 2という範囲であるので、トレンチ調査と殆ど変わりのないものであるので、まず、神社境内の運動場の部分を中心に重機を使い盛り土部分を剝ぎ、遺構面を探すという方法を取った。そして、遺構面を検出し、これを調査したのである。

5. 検出した遺構

遺構は神社境内の北の端にあたる部分で、落ち込みを検出し、これを掘り進め、溝を検出した。 溝の幅10口であり、東側部分は急激な落ち込みとなっているが、西側部分はなだらかな立ち上が りで、一部はテラス状となり、頂部に至る。頂部にも幅50cmの溝がある。これより西側は礫層となり、自然の落ち込みとなっている。自然地形も神社の西側は埋没谷となっているので、これに続くものとおもわれる。



第2図 両の木神社遺跡発掘区域図



⑦ 5層と同様な土層

② 前径と同様な上間 魯 黄褐色土 地山の黄色砂質土が混入している。 ③ 黄褐色土 地山の土層に鉄バクテリアによる鉄分が含まれる。

⑩ 黄褐色斑点土 地山の土層に鉄物が点在する。 ⑪ 褐色土 地山の黄色砂層の上に堆積した褐色土

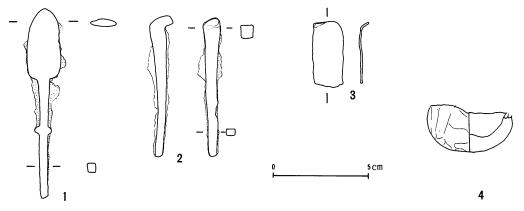
6. 遺物の出土状況

遺物の出土状況は第3図に示したが溝のテラス部分に集中している。鉄鏃は溝の深い部分にあり、丸瓦も溝の中から検出している。

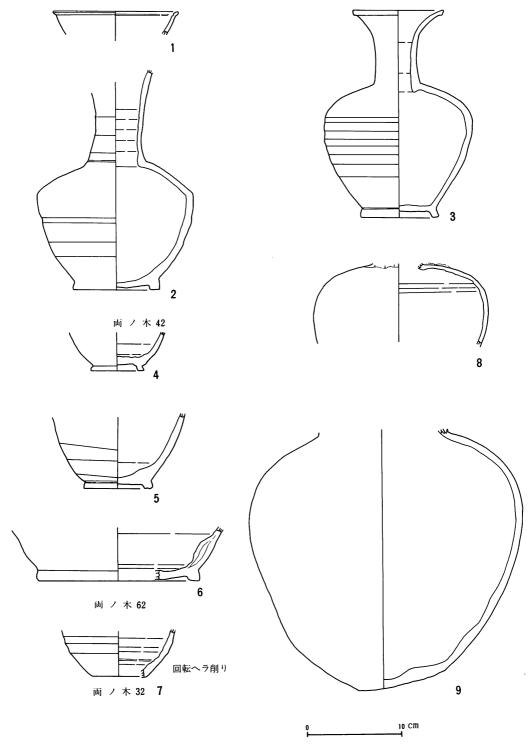
7. 遺物(第4図1~3、第5図1~9、第6図1)

第5図1は土師器で、玉縁口縁をもつ。この種の破片は数多く見られる。2以下9まで須恵器である。2は長頚坩で、肩部の張った形態で、高台をもち、口縁部を欠く。3はほぼ完形の長頚坩で、2よりやや肩部の張りが丸みを帯びる。4はやはり長頚坩の底部、5もやはり長頚坩の底部、6はやや大型の坩の底部。7は高台がないが、坩の底部かもしれない。8は無頚坩の肩部と思われる。肩部には自然釉が見られる。9は甕であるが、口辺部を欠く。

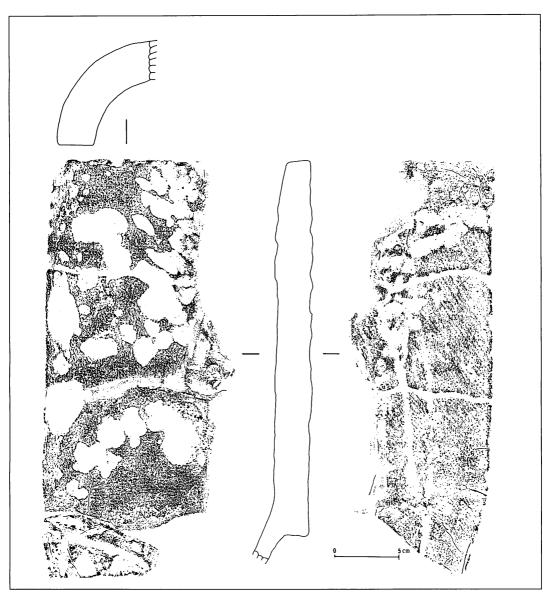
第4図1は鉄鏃で形式は箆被三角形式で、2は鉄釘、3は不明の鉄製の小さい鉄板である。第6図1は丸瓦である。表面の剝離が著しいが溝の底近くで検出されている。



第4図 出土鉄製品ほか



第5図 出土 土師器・須恵器



第6図 丸瓦











8. まとめ

遺構の性格

遺構の性格については、はなはだ狭い範囲の調査で結論的なものはないが、まず古墳の周溝と考えられる。この地区にはかつて古墳がいくつかあったと伝えている。また溝の底より、西側にむかって、立ち上がる部分にテラス状の部分があり、そこに遺物が集中した点も古墳説を裏付ける。ただし、レーダー探査のデモ調査では、この溝は円形に曲がらず、東南の方向に伸びるようである。また西側の部分が自然の落ち込みとなり、古墳の墳丘とするにはやや無理があるようでもある。先の県埋蔵文化財センターの年報では、レーダー探査の結果から古墳説を否定し、地名の両ノ木→龍ノ木から何か門址のような施設の存在を予想したが、古墳説もあながち否定できない。

遺物の時期

遺物の時期は土師器はおよそ9世紀後半に位置付けられようが、須恵器がこの溝状遺構に伴う ものであるから、この年代が重要である。もし仮に土師器と同様な年代が与えられるとすれば古 墳説は成立しない。

しかしながら、溝の立ち上がりより、検出された須恵器は、年代的には6世紀後半から7世紀 前半に比定され、この付近の国分古墳群、千米寺・石古墳群の出土遺物と近似し、溝の立ち上が りのテスト状の部分より出土したことと合わせて、須恵器からは古墳である可能性の方が大きい。

山梨県埋蔵文化センター調査報告 第44集

1989年 3 月25日 印 刷 1989年 3 月31日 発 行

下 長 崎 遺 跡

カップ き じんじゃ 両 の 木 神 社 遺 跡

印 刷 株式会社 少国民社

